

日本書紀傳 廿六卷一

和書
一〇五二二號

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156 (92)	
函號	特	85 1

内 一〇五二二號



教文
百一

圖書
大庫

三第

日本書紀傳二十六之卷

神代卷第二十四

書

寶劍出現章

穗積重胤

謹撰

書曰素戔嗚尊欲幸奇稻

田媛而乞之脚摩乳手摩乳

對曰請先殺彼蛇然後幸者

宜也彼大蛇每頭各有石松

日本書紀傳二十六

〇一

兩脇有山甚可畏矣將何以
殺之素戔鳴尊乃計釀毒酒
以飲之醉而睡素戔鳴尊乃
以蛇韓鋤之劍斬頭斬腹其
斬尾之時劍又少欽故裂衣尾

而者即別有一劍焉名為草
薙劍此劍昔在素戔鳴尊許
今在於尾張國也其素戔鳴
尊斷蛇之劍今在吉備神部
許也其斬蛇之地則出雲鞆

之川上山是也

是素戔嗚大神出雲國小御在坐て彼八岐大蛇を退
治させ御在坐ける御事の異説のこしして其得さ
せ給へる神劔の所在と斬給へる御劔の行方とを記
して他事無き者あれば正書及他一書の闕を補ふし
其考據の小備ふ可し此一條を以て全き者ト為の本よ
り非るあり然れば前小事を加へ後小意を補ふして
全篇の旨趣をふむ曉る可なり此中小大蛇の象
形を書さねばト毎頭各有石松而脇有山と有る一

章ハ他ハ且ても云ざる事ハ正書小頭尾各有
八岐眼如赤酸醬松栢生於背上而蔓延於八丘八谷之
間と有る小合せ讀て其妖蛇の狀をし實小想像の識
る可ければ甚奇ト傳つてハ有けり此一ト此傳
の殊小勝ゆたる所ありける其次小乃計釀毒酒以飲
之と有る正書小八醞酒と云ハ其酒を製熟トするの事
小依て号る所ふれば其季ト狀ハ知べりトと
第二一書小至りて可以衆菓釀酒ハ甕の文有て此時
の酒ハ尋常のトハ別れて衆菓を集めて酎酒と成
給ひ其を折返トして八醞酒と成せる事ふむ甚詳ハ

此酒の毒酷なる
か為大地の其所
に依り斬り奉れ
り一々毒あり物
の毒なりと云々
音味より有けれ
始より設させ給
り一御事あるべ

見えたりける然る小此小毒酒と有ハ其能を云小似
て實小協へる小似たりと雖も此唯ハ醒其酒小酔伏しめ
て其所を斬せ給ハむとの神策りて大神の御名小負
せる健く速き御所為ふむ此不在る所ありける若始
より其酒を毒物小任立て兵刃の威を用ひさせ給ハ
ずして殺させ給ふと云々ハ斯許り可畏き大神小御
在り坐す物を如何ある毒惡の酒を物為させ給ひ
て居あざり小其外ハむ期を待せ給ふ可うりけりめど
も然る女ハ一々奸りて御心御在り坐べき神性小
ハ御在り坐ざりけるハ此毒ハ云々字あり甚心憂き

き思ひ不するや此時小酒を進めて其大蛇を斬給へ
紀小既而余黨猶繁其情難測乃顧勅直臣命汝宜帥大
来目部作大室於忍坂盛設宴饗誘也虜而取之道臣
命於是奉密旨掘窰於忍坂而選我猛卒與虜雜居陰期
之曰酒酣之後吾則起歌汝等聞我歌聲一時刺虜已而
坐定酒行虜不知我之有陰謀任情徑醉云々俱拔其頭
推斂一時殺虜無復噍類有と事の狀の攸たる事小
て饗を設て虜の心を怠しめ謀伐むと又蛇鞞鋤之
為させ給へるふれハ毒酒ハ非りけり
斂の名も愛たり此外ハ蛇之虜正と云ひ天蠅斫之
斂と云ひ古語拾遺ハ天羽ハ斬斂と云類ハ共ハ其蛇
を斬せ給へる由小依て号る所あり正書ハ十握斂と
有ハ其斂の長大あり事ハ係りて例の名ハ非ず此
小鞞鋤と云ハ其斂の両及ありて尖ハ形小因り

祢して上古の製様を想ふ不足なりと謂つ可なり
有ける又此末の其素戔嗚尊断蛇之劍今在吉備神部
許也と有ハ殊小奇く己ハ第三一書ハ此今在石
上也と書され古語拾遺のり今在石上神宮とハ傳へ
たれど其ハ神名式ハ大和國山邊郡石上坐布留御
魂神社名神大月次と有る是少て石の石上ハ大和ふ
る山こゝ有けれ若此傳の無くすハ彼備前國赤
坂郡石上布都魂神社其御劍の納り由ハ知れ
ざくまを然るも甚も受たき事あり
但右
在石上と云ハ論ル有る事ハ傳世五卷四十九丁
小己ハ云々ハ如ク其實ハ神名式ハ山邊郡出雲雄

神社是あり即石上神宮の右ハ此一書の大教較あり諸
門内小御在坐す神あり此素戔嗚大神の御兒神等の御事御紀ハ天より帥
て降給へる五十猛命大屋津姫命栴津姫命と三柱と
此顯國して令生給へるハ大己貴命神亦名湯之湯山主清
三名挾漏彦八島篠神唯一神を載りたるのミヤ
て其餘の神等の御事ハ皆がハ略りたるハ御紀
ハ凡て其緯の方ハ佗書ハ委任て敢て其事を云ハず
唯皇統の天津日繼の御方の經ふる方を主と爲る
ハ小就てハ其大己貴神の御事ども其因依就て記す
れたる程の御有意ありければ此ハ物爲りれざり

△彼記最上巻より
ぎ徒の出来りて
平公志と夫は事
正ふとせし

けし者と所見たり然るを幸し古事記に他御兒神等
の傳存るハ實小神祇恩賜云者ありけり故今も其
記の委任て有ぬ可き事あり有れども此御紀の傳
を仕奉る小就てハ此方々の力を盡す事云も更ふ
れハ後世小我迹を踏む者の有あむ小古事記を讀む
輩の御紀を屑とる爲ずして鈴屋大人の心違へる
か如くある可きを懼れり時、小彼記を抄録て傳す
る事あむ多在るを其中小甚止事無きあむ已小傳せ
三三百一丁り引る彼記小又娶大山津見神之女名神大
市比賣生子大年神次宇迦之御魂神柱ニ見えたる此

△續經郡小宇ら比古命

二柱の御事ハ條ニ小云るを又其御子神等の傳ハ其
下小上件大年神之子自大國御魂神以前下大土神以前
并并十六神ニ有る其次小上件羽山戸神之子自若山咋
以下若室葛根神以前并八神と有る此二件二十四神
の御事をも事の因小注し奉る可きあり又此紀記小
漏給ひて出雲風土記小遺り御兒神猶有る意字大
原二郡小青幡佐久佐日古命島根郡小都留伎日子命
國志別命秋鹿郡小磐坂日子命衝并并等乎而留比古命
神門郡小八野若日女命和加須世理比賣命あいの御
名出たるハ何れハ御父素戔嗚大神の御功業を助奉

△私記ハ米左半
止之五ノ有ル也
欲字ハカキテ此

とせ給へる甚止事無き列の神ヲ渡りて給へる狀不
此ハ其ハ併せて此下小採拾ひ説てし
伊努郷の
下小國引坐意美豆努命御子赤衾伊努意保須美此古
佐俣氣命申す其御子小御在坐其ハ瑞珠盟
約章第三一書小謂申能野大隅命小渡りて給ひ其
小就て御父意美豆努命申すハ即素戔鳴尊の御事
小渡りて給ふ由己ハ傳十五卷二百九十四下十八卷
三十七下小云レハ此ハ除きつ又猶縫郡大原郡小
出たり字之治比古命ハ其御子有可事其御祖須
我祢命ハ即此の奇稻田姬命ハ聞申るを以て知れ
たり其事傳廿三卷三百六下又○欲幸奇稻田媛の欲
廿四卷十六下小云レハ除きつ
幸ハ米佐麻久淡毛思富志氏之訓ハ幸字を米須と訓む
例ハ天孫降臨章ハ鹿葺津姫の事を皇孫因而幸之一
夜而有娠之有レ此也見元其第二一書小皇孫謂姉為醜不御而

△然朕與一貫而脈産

四羅妹有國色引而幸之ミトア有て御を米須と訓之幸之を
美登阿多幣麻須と訓之即與身與坐ある由己ハ傳六
四下小云レ海宮遊行章ハ彦火ニ出見尊因娶海神女
三下小云レ豐玉玉姫之有る此ハ娶字を訓之無仁天皇十五年御
紀ハ喚丹波五女納於掖庭之有る此ハ喚ハ米須不
引納ハ米志伊流ナリ景行天皇四年御紀ハ茲國有佳
者天皇悅之心裏欲見具十三年事疾皇遣皇孫御孫皇孫
今不勝皇威之威暫納命
是ハ以天皇宮于後宮之日始喚髮長姫云々有る此ハ見を
徴を以米須と訓之又仁德天皇二十二年御紀ハ米須納ハ米佐礼麻章流
納於宮中時皇后到難波濟開送皇合歸皇御孫根之地有る
小娶を以合をも米志都と訓之

△私記ハ米左平
止之豆コ有ル也
欲字少カク入テ此

とせ給へる甚止事無き列の神小渡とせ給へる状不
此ハ其心併せて此下小採拾ひ説てしとす獨出雲郡
伊勢郷の
下小國引坐意美豆努命御子赤衾伊努意保須美此古
佐俣氣命申すも其御子小御在坐其ハ瑞珠盟
約章第三一書小謂申す能野大隅命小渡とせ給ひ其
小就て御父意美豆努命申すハ即素戔嗚尊の御事
小渡とせ給ふ由己小傳十五卷二百九十四下十八卷
三十七下小云れハ此ハ除きつ又楯縫郡大原郡小
出たる字之治比古命も其御子ある可事其御祖須
我祢命ハ即此の奇稲田姫命聞申すを以て知れ
たり其事傳廿三卷三百六下又○欲幸奇稲田媛の欲
廿四卷十六下小云れハ除きつ
幸公采佐麻久思淡也富志氏之訓ハ幸字を米須と訓む
例ハ天孫降臨章ハ鹿葦津姫の事を皇孫因而幸之一
夜而有娠之見有リ此也元其第二一書小皇孫謂姪為醜不御而

△然朕與一宵而脈産
殊帝由是生疑大連
曰然則一宵喚幾廻乎
天皇曰七廻喚之大連
曰此娘子以自身意奉
與一宵安睡生疑略
有之此與右小幸ニ
有之同トク入米後小喚
字を書ハカス

罷妹有國色引而幸之ミトア取ル也有て御を米須と訓之幸之を
美登阿多幣麻須と訓之即與身與坐ある由己小傳六
四下小云リ海宮遊行章ハ彦火ニ出見尊因娶海神女
三下小云リふかしく又此下小引之ハ與字を阿多波須と訓之小合せ思ハ可也
豐玉姫玉之有る此ハ娶字を訓之無仁天皇十五年御
紀ハ喚丹波五女納於掖庭之有る此ハ喚ハ米須不
引納ハ未志伊流米あり景行天皇四年御紀ハ茲國有佳
人曰第媛略中天皇則留而通之中略今不勝皇威之威暫納
帷幕之中之有ハ此ハ通ハ米須納ハ米佐礼麻葦流
あり雄略天皇也年御紀ハ天皇幸推媛ト之有るを推
直して知べし此ハ皆此言ハ一也常小
不事を與落布と云を其方

を昇下めて米須とハ云ふり万葉二二十 天皇萌之時
太后御作歌ハ八隅知之我大王之乃暮去者召賜良之明
來者問賜良志神岳乃山之黃葉乎今日毛鴨問給麻思
明日毛鴨召賜萬旨其山乎振放見乍暮去者綾哀明來
者裏佐備晚荒妙乃衣之袖者乾時文無と有る此御歌
召賜も右あると同トナホト帷幕の中ハ納れ奉る事を云ひ
問賜ハ御許ハ侍々ハせ給ひて御言語御在ハ坐ハ御
事を黃葉ハ寄せて詠せ給へる少御夫婦の御愛情
を盡させ給へる者少て感け奉るも猶余有て多右
の召も問ル已ハ御夫婦の御語ハ御在ハ坐す上の
常を宣へるふれハ右ハ舉たる例共の始て嫁ぐと云

△正書ハ素天鳴御勅
曰若然者汝當以奉
皆耶在事記ハ不速
預佐之男命詔其先
老疑是汝ハ者奉
於吾哉ハ有る小當
ハ云ハ

ハ異ふるか如ト雖も始て召るハ常ハ喚るハ
事ハ於て同トけられハ同言カハて同義ハ事云ル
更アリ通證ハル幸召セ茶色云御之親愛者曰幸有リ
○乞之ハ許比多麻比伎ハ訓ハ節米給ふ義
あり古事記日向宮段ハ詔吾欲目合汝奈何答白僕
不得白僕父大山津見神將白故乞遣其父大山津見神
と有る乞此ハ同ト此ハ其婚ハむと爲る女ハ戀ふる
とハ異つて其父の許ハ乞ハせ給へるふれハ乞ハ戀
と本同言ハ其活用ハ其活用ハ同トハふる事ハ先
達の説定ハルハ如ク求る意の乞字ハ詞ハ衛ハて
許開ハ活ハ人ハ戀ハ中ハ二段活ハ脚摩乳
許此許布許布流許布礼ハ活用ける者アリ
○脚摩乳
手摩乳對曰請先殺彼蛇然後幸者宜也ハ此少てハ

二神より大蛇を退治させ給ふ事^本を請奉りし趣
りて第二一書小吾當爲汝殺蛇と有て大神の御方よ
り進め詔給へる小異あり今何れを宜けむと考ふ
小正書ある二神の言小所以哭者往時吾兒有八箇小
女毎年爲八岐大蛇所吞今此女童且臨被吞無由脱免
故以哀傷と有て其大蛇の小及絶たる事として手
束物て唯泣小哭居たるふめり次小素戔嗚尊勅曰若
然者當以女奉吾耶と有ハ其女をば小吾小奉ハ其
因を以て大蛇を退治させ給ハむ云意を言め給へる
御言あり次小對曰隨勅奉其見えたる此所の文事

の略り小過たる可し古事記小恐亦不覺御名を答詔
吾者天照太御神之伊呂勢者也故自天降坐也尔足名
推幸名推神自然坐者恐立奉り有る此ハ唯其女神を
奉るのこの御對ハ非る可し其故ハ第二一書小見
えたる如く汝の爲小蛇を殺してむとハ詔給へる物
の其老夫婦の心ハ如何危ぶも奉りて其女神
を乞給ふ小就て御名を問奉り小掛あくる甚も可
畏り此大神小御在坐せば必定其大蛇を退治させ
給ふ可き御事を心小知て應へ奉り者ありけり
然ハ此ハ其ハ實小異ある傳の如くと雖も甚く
事を約ハる者に見ゆハ然の難ハ云ハる

や○幸者ハ此ホテハ己ハ嫁給不可キ程ハ長クセ
給ヘテ趣アリ第二一書ハ此ハ異クテ其大蛇の事
を詔語申セテ頃間ハ(宋)有身セテ時^ハの事アルハ餘
リアルを此ホテハ又其長アルハ過たり正書ハ少女
童と有テ大神の往々后神ニ爲ラセ給ハハ御心坐ハ
依テコトハ其父母ハ乞給ヘリけれ未婚の御事アル
ハ此ホテハ思ハ寄セ給ハザリツク者アルハ甚正
實ハ協ヘテ者アル此ル其有意ハ有アルハハ文を簡
古ハ物爲レたス故ハ然ル細クアル事アルハ行
耳クぬカ如クアル見申メス○宜也ハ私記ハ與介年

と有リ然ル事アル古事記國生段ハ伊邪那岐命云云
而以爲生成國土奈何伊邪那美命答曰然善と有ハ語
勢の相似タル所アル記傳四ニ下ハ然善ハ斯訶余祁
牟と訓ベハ男神の詔給ヘテ事を諾タル御答アル^{中略}
余祁牟ハ善加良牟と云ハ同ト古言アル天智天皇御
紀の童^謡ハ多拖尼之曳^鷄武ニ有リト云レたり諸此
ハ上ハ欲幸奇稻田媛而乞之ニ有テ諾シ奉リテ答申
セテ言ハテ正書ハ隨勅奉兵ト見え古事記アルハ足
名推幸名推神自然坐者恐立奉ニ有テ同儀^旨アル所ナ
リ但此所の訓與介年ト讀^切テハ言續クズ右の古事
記ハ倣ヒテ其下ハ麻衣志伎の言をアル漆ベナリ

け○每頭ハ各正書小頭尾各有八岐之有る其八岐あり
己ハ口説ハ每頭ハ岐之譜ニ云リ
 を云ふなり此ハ每頭ハ各石松有と云ひ而脇小山有
 と云て其尾の事を云あるハ尾方ハ頭と等しく石
 松の有けるハや下小斬頭斬腹其斬尾と三段小云る
 を照し考ふ可くある有ける是即古文の餘韻を識の
 法あり○有石松ハ下小有山ハ句を分て書さるなり
 づル石ハ松ハ山上小在る者あり山ハ其石松を載て
 聳立る者あり有れば別事ハ非る可し正書ハ松栢
 生於皆生と書され古事記ハ身一有八頭八尾亦其
 身生蘿及檜楡と云る類共ハ山無くして何れの處小

ハ松栢ハ生出む其大蛇の皮を割て檜楡ふどの深山
 木ハ如何し如何し生出る理の有む然る大蛇の
 巨魁あり故小頭中尾共ハ山を戴載て曳歩き形
 状を云ある事知べし又先ハ思寄るハ石松と
次ハ雨脇有山の下ニ云合せて
 本草和名小卷栢和名伊波久美一名以波古介石韋和
 名以波乃加波一名以波之一名以波久佐ふど云類ハ
 西國邊あり石松と云物是なりと思ひしハ其
 今捨てき○石松の石ハ諸本共ハ伊波富と訓て和名
 抄小巖和名伊八保こ見え字鏡小礪大伊波保こ有る
 是ハ甚く深山の状あり松ハ里小多き物ありども
 深山ハ殊更なり物少右小同一万葉十四
二十小伊

波保呂乃蕪比能可麻都と詠る呂ハ助辞イハシハ巖之
傍之若松シノカミハ是石松イハシの並云る例あり十二三小磯上
生小松を或本歌曰巖上尔立小松又ニ二神左備而巖
尔生松根之と有る類ハ其巖上小立るを云ふ此
石松イハシハ異ふリ猶三四十六高山乃石穗乃上尔伊座
都流香物又高山之石穗乃上尔君之卧有六二十八小巖
成常磐尔座又四十一春去者岡邊裳繫尔巖者花開乎呼
理又巖者山下耀錦成花咲乎呼理九十二一小御食向南
淵山之巖者十一一一一見渡三室山石穗管十九三十三
小奈泥之故波秋咲物乎君宅之雪巖尔左家理家流可

母又雪島巖尔殖有奈泥之故波二十四十七高山乃伊
波保尔於布流須加我乃根能と有て何れカ崔カ鬼カ嶮カ
岨カ一一状カ云るを以て此の石字を巖の如く訓カ小
古人の深く意を用ひしれたるを知カ猶カ和名抄小
盤カ和名以波と有る此小秀出るの義を以て富の言の
从カ入るあり尔雅カ山屋之高曰巖と見えたる即此義
小近
○兩脇ハ布多都能加多波良尔と訓カり古言あり
垂仁天皇七年御紀小則蹶折當麻蹶速之脇骨亦踏折
其響而殺之と見え和名抄小脇助カ和名加太
也助カ和名太須と有て共小加多波良と有る即傍腹カの
介乃保祐
義あり又和伎とも訓べ一同抄小腋カ和名肘腋也脇カ亦
作

又八頭より八尾へ

肘又與腋カク下也と有る此肘腋して其よりハ上方ふれ
カクとハ其下方ハ係て和伎と云ふ常あり凡て和伎と云
ハ物の片邊カタハラある所を云称ハ一有けれハ右の傍カクハ同
義ハ歸カクあり俗ハ片腹痛と云事ハ有ル脇痛と云事ハ
本歌曰の方ハ男自物脇挿持と作れ
是即脇字を和伎と訓べ證あり○有山ハ其大
蛇の背上より兩脇へ係て大なる山を載持るを云ふ
リ即正書ハ松栢生於背上と有ハ兩脇有山を合せて
知べく又右ハ松栢と有を此ハ每頭各有石松と有を
合せて其有石松と有ハ有山の義あるを曉る可く若
して其八頭ハ各山有り皆上ハ山有り兩脇ハ山有る

上ハ其八尾ハ且りて悉く山有て上ハ巖石有り松栢
立ち生ひ檜楡茂り苔蘿生して實ハ深山幽谷にも謂つ可
き状ふりけむ事を知べ正書ハ蔓延於八丘ハ谷之
間々書され古事記あり其長度谿ハ谷峽ハ尾と有を
以て其長さを度る可く此ハ兩脇有山と有を以て其
幅ヒロを思ふ可く者又此ハ二神の其状を語りて甚可畏
申し素戔嗚大神の其大蛇ハ對ハせ給ひて汝是可畏
之神と勅給へるを以て實ハ非常なる妖蛇ふりけむ
事を思ふ可くある有ける又其古事記ハ謂ゆ蘿ハ
也と云ひ蘿日本紀私記云蘿比加今ハ蘿也又松蘿一
名ハ蘿和名萬豆乃古今一云佐流乎加世と有て何れ

〇甚可畏也ハ其甚小ハ狀を有ル雄略天
 皇御紀五年小天皇校獵于葛城山略俄而見逐嘖猪從
 草中暴出逐人猶徒綠樹大懼と有る其歌小斯能字
 多枳舸斯固游倭戎左尋能衰利志と有て古事記ル右
 小同ト又其七年三緒岳神の形を見行も給ふ所小
 螺羸答曰試往捉之乃登三諸岳捉取大蛇奉示天皇天
 皇不齋戒其雷虺ニ目精赫ニ天皇畏蔽目不見却入殿
 中使放於岳と見えたる一ハ嘖猪を可畏一ハ大蛇
 を可畏と坐るあり凡て神皇(可畏)の敬奉る御上ハ申

〇深山幽遠の地小生る物あり是亦右の松栢檜楡の
 幾年々年序を經つし事を知る可き爲小然る物名
 出せり
 〇甚可畏也ハ其甚小ハ狀を有ル雄略天
 皇御紀五年小天皇校獵于葛城山略俄而見逐嘖猪從
 草中暴出逐人猶徒綠樹大懼と有る其歌小斯能字
 多枳舸斯固游倭戎左尋能衰利志と有て古事記ル右
 小同ト又其七年三緒岳神の形を見行も給ふ所小
 螺羸答曰試往捉之乃登三諸岳捉取大蛇奉示天皇天
 皇不齋戒其雷虺ニ目精赫ニ天皇畏蔽目不見却入殿
 中使放於岳と見えたる一ハ嘖猪を可畏一ハ大蛇
 を可畏と坐るあり凡て神皇(可畏)の敬奉る御上ハ申

仁徳天皇十六年御
 紀歌以播區傳
 輪伽之古俱等母
 右を釋小巖石目嶺下
 洞之時人何不恐懼仍
 欲言恐悚之發語
 引此詳字と有る如又
 〇雙疊恐山常知カ
 也又

可ハ常ありハ除て方葉七十四小山邊庭薩雅乃祢良
 比恐跡小牡鹿鳴成十三十小雲隱小島神之恐者又十三
 二〇奥山之於石蘿生恐常十一十四小隱口乃豐泊瀬道
 者常滑乃恐道曾十三一十小惶八神之渡者吹風母和
 者不吹立浪母疎不立跡十五二丁小和多都美能可之
 故伎美知子也禎家口母奈久奈夜美伎氏伊麻太尔母
 毛奈之由可年登二十三十小海原乃可之古伎美知子
 あり有る何れハ恐懼の意小云る者少て皆上の例不
 〇諸此小二神其大蛇の事を委曲小語申して結句小
 甚可畏也ハ申せる語勢恰ル古事記海神宮段小其
 婢等天神御子の御有狀を其大神小申して〇何以殺
 結句小益我王而甚貴ハ申せる小相似たり

之ハ私記小以加尔之底加已呂之太万波年と有り猶
上を以加尔之底加毛之訓へきふり万葉三四丁朝
尔食尔欲見其玉乎如何為鴨鴨從乎不離有年十一三十
小大船乃絶多經海爾重石下河如為鴨鴨吾戀將止と有り
共小其疑ふ所由を人小問係る辞ふれば加と云ル加
毛と云ル同義ふももの歎息の言を加ふる時ハ大
小其語少カ有て慥ふれば同ト事あり五卷貧
可尔之都ニ可汝代者和多流と有ハ為乍哉の義あり
此ありハ必加と云て加毛とハ云れざる所あり
○計ハ波加良此氏と訓ハ此ハ寶鏡開始章小計其可
禱之方と有り計と同ト事あり其設を成一備置て其

度不當命備ふるを云あり海宮遊行章小老翁曰勿復
憂吾當為汝計スレハ之と見え古事記あり我為汝命作善議
と有り善議を余伎許登婆加理世武と記傳小訓れ
是あり武烈天皇前紀小太子甫知鮪曾得影媛悉覺
父子不敬之狀赫然大怒速向此夜大伴金村連宅會兵計策ハカリ
の計策ハ更ふり猶事機を便り方便を慮り許登婆
加利と訓れ所あり有り万葉四五十丁小吾妹子乎
次相見六事許計為與十二七丁小玉千次不懸將忘言量欲
又ハ暫毛心安目六事許計為與又十二二丁事計言為吾兄子
十三三丁事計夢尔今見社有る也此計の上小事と云

公等二書ハ詔中
に醸業を以て酒
を醸し給ふ事と

どの言の加ハれる者あり
又御紀ハ制度の字を波加
小程字を波加理と訓し和名抄ハ權衡ハ波加利の名
有ル右ハ同ト偕波加良比ハ波加理の意の緩やうふ
るふ
○毒酒ハ阿志伎佐祁と訓し毒字を然訓ハ神
武天皇戊午年御紀ハ進至熊野荒坂津亦名丹敷浦因誅丹
敷戸畔者時神吐毒氣人物咸痺仁德天皇五十五年御
紀ハ是後蝦夷亦襲之略人民因以掘田道墓則有大蛇
發瞋目自墓出以咋蝦夷悉被蛇毒而多死亡唯一二人得
免耳と所見たる是あり大同類聚方ハハ阿志ハ毛能
又阿志阿沼母能と云事有り即毒氣物又毒味物の義
あり偕此酒ハハ傳世五十九ハ云るハ如く私記ハ

問何故必用菓釀酒哉答是取集惡味毒菓而釀之以其
醉人を甚之故也と見えたる惡味毒菓と云ハ後人の
此一書ハ合せ云る推量ハ一ハ始より然る毒物を以
て製し給ふハ非ずと雖も其酒を以て度ハ造
返せらるハ故ハ右ハ其醉人を甚と云ハ八醞の耐酒と
ころハ成り多ありけり本より其毒ハ中ハて自斃る
を待せ給ふハ非ず其酔て睡れを伺ひて屠殺
させ給ふハとの神策ハ御在ハ坐す事諸の傳ハを
参考ふれば甚著明りける由己ハ此卷首ハ委ハ
論定めたるハ如ク然れば此ハ阿志伎佐祁と云るハ
彼大同類聚方ハ謂ゆる阿志阿沼

○素多鳴尊此字
金澤本ハ無

の類也唯其耐酒と成て味の嚴酷一を云事あり
を更ハ毒字を此ハ當_レれたる爲ハ大ハ眞と失ハ
事あり此爲て○飲之ハ合飲_ハ訓_ハ正書あり
讀む可くこと○飲之ハ合飲_ハ訓_ハ正書あり
飲醉而醉睡ハ大蛇の自飲て醉るあり第一書ハ每
口沃入と有ハ此と同じく其大蛇ハ飲_ハむる所あり
是あり○醉而睡ハ正書ハ同ト傳世三百八十一ハ注せ
リ○蛇韓鋤之劍ハ蛇ハ第一書ハ謂由る蛇之農正
の蛇之ハ同トく此大蛇を斬屠_レせ給へる故事ハ因
て上ハ冠云_レる也韓鋤と云ふハ形容ハ依て着たる
名ありけし備私記ハ韓鋤劍を加良左支乃津美乎
と有ハ今加良佐比と訓ハ違へり左支ハ鋤の音轉ナ

る可きハ劍を都美と云事心得難一釋ハ私記曰問韓
鋤之意如何答其形似鋤故名之今世之須岐也先師説
云加良須岐歟と有リ須岐ハ和名枚農耕具ハ鋤_ハ和名
去穢助苗也と見え加良須岐ハ犁_ハ和名加良須岐_ハ田器也
有る是あり纂疏ハ此を以て韓鋤猶言犁也劍形類
犁_ハ而斬蛇故曰蛇韓鋤と注させ給へり今思ハ_レ鋤_ハ似
似たるハ犁_ハ類なるハ加良須岐と云ハ云べり
けれ然るハ加良佐比と云ハ故由の無てやハ猶考
ふる其犁の下ハ耒鏡_ハ佐伎下字と有て此ハ謂由る其
犁_ハ鋒を云ふハ此より及_レて其造作具を見ら_レ鏡

外小幡唐鳳土
 記小幡保郡北
 國所名佐比者
 出雲之大神在
 神尾山此神出
 國人經過此處
 十人之中畜五
 人五人之中畜
 人故出雲國人
 作佐比奈於此
 遂不和受所以
 然者比古神先
 比賣神後來此
 神不能鎮而行
 之所以古神怒
 也然後河內國
 日郡枚方里漢
 來至此山迎而
 敬崇之僅得和
 鎮肉此神在名
 曰神尾又作佐
 比奈矣即号佐
 比國也と見之

漢語抄云加 犁鐵又土具也と有て此鐵金穗串と云事小
 奈布久之 其苦鋒を以て名る所あり若て又農耕具小鑄漢語
 佐比 鋤屬也釋名云鑄迫地本草也と有ハ鋤杖と云事
 都惠 あり是即右の犁小り鋤小り佐比と云稱の有る證不
 あり然れハ私記ハ加良左支と有ハ右小出せる末鋒を
 佐伎と云ふ其を取れるありけり又鑄を奈布久
 之と云る右の犁又鋤の尖鋒の狀 偕古事記海神宮段
 と云るふハ又此小相協ハり 小其和逆將返之時解所佩之紐小刀著著其頸而返故
 其一尋和逆者於今謂佐比持神也と有を見ればハ刀
 を佐比と云ふ似たり又神武天皇戊午年御紀小稻飯
 命の御事を乃拔劍入海化為鋤持神と見えたる此ハ

唯劍を佐比と云ハ如如推古天皇二十年御紀ハ大御
 歌小多智奈羅磨句禮能摩差比ハ吳之真鋤あり私記
 小良劍之名也と云るハ此の韓鋤ハ其意同ト然れど
 其佐比と云ハ如何ある義ありとも猶詳ありけり
 けり故思ふハ右の鑄を佐比都惠と云て鋤屬也と有
 を合すハ佐比ハ崇神天皇六十年御紀歌小柳句毛
 多菟伊頭毛多立。出雲。鳥帥。鷄流餓波鷄流多知菟頭邏佐波磨大カ。昔。枳佐
 微那無辞珥阿波禮と有る佐微ハ真身サ小尋常の劍身
 と云如くふれども然らず佐微ハ佐比ハ其小真身コ
 るか其片及ある小別ちて両及あるを云稱ふりけり

然して此乾鋤
 帝の御用なり
 共の御用なり
 見給ふ可く其形
 似るる爲あり事
 此乾鋤者鋤状似
 鋒より可くせし
 思ふ可く

其西又ふる鋤鋒と犁鋤の鋒と相似たるを以て鋤の
 佐比より及ぶして却りて鑄ふどの名少く成れるふ
 りけり然るに上古より漸次小其西又ふるに廢りて
 片又ふるの多く成以て往つるが何時と無く鋤
 の佐比ハ云ずして犁又鋤の稱のこの如く成れる小
 こころハ有めれ借又右の末鏡を佐伎と云り鏡を如奈布
 又ふるか如きを以て云ひ鏡を如奈布
 久之と云も俗小畠具世と云物ふるか竹篋の状した
 る物あり其れ鋤鋒ナル鋤鋒ナル似たる物ふるを
 考合す可し然るを新井君美説ハ佐比を十の名ふ
 りと云るハ唯古事記をのこ見て度々考ふるあり

○斬頭斬腹其斬尾の事ハ右小每頭各有石松西脇有
 山と有ふ見合す可き事上ハ云るか如く借又此小

箕原跡小下の敷
 川是也と有記
 所斬之地也上云
 蛇而脇有山蓋即此
 山并之御説の有
 思ふ可く

意を補ひて見る可き事あり有ける被石松有り山有
 りと云る其物を共小斬らせ給へるハ非ト何
 水へる蹶離ち遺給ひけめども今其傳を亡るひたる
 者ふる可くや已ふ天孫降臨章ハ所見たる味糲糲高彦
 根神の彼喪屋を斫付給へるは此即落而爲山
 有る物を況てや皆上ハ巖石有り松栢有り檜楡生い
 苔蘿生ふる程の山ありける物を何れも砕散て別
 小敷箇の山岳と成けむ事更小疑を容べりしむ
 有ける但今其所在を知べりしむと難くハ仁多
 郡鳥上ハの邊ハ有る大山ハ山ハ何れも
 有るべりしむを更小求る由無し其鳥髪地ハ環を
 接へたる伯耆備後安藝國ありし土人の傳ハ非ト

○別有一劍の別ハ右の蛇韓鋤之劍小對へて置る字
あり一劍を阿夜志伎都留岐と訓る事正書小此登都
能都留岐と訓るとハ異あるハ此小限りて然る習有
る事と所見思たり然るハ正書小ハ上小一劍と云て下
小是神劍也吾何敢私以安字と有るを以て一劍をハ字
の如く訓アハヒ、第四一書小ハ有一神劍と有る一の下小
神劍也の言有る依て此登都多々を此ハ別字ハ右の
一字小當る故小一劍を神劍と同トく訓來る者と所
見たり○昔在素戔嗚尊許ハ正書小素戔嗚尊曰是神
劍也吾何敢私以安字乃上獻於天神也と有る如く得

させ給へる即天上小奉らせ給へる趣ふれども暫間
あても御許小置させ給へる事ハ第四一書小此不
可以私用也乃遣五世孫天之菅根神上奉於天と有る用字少て所知たり然れども此の
文の狀を思ふ小右小天之菅根神を遣給ふと有る
其神を五世孫と云僻傳の有る爲小此大神より四世
の間ハ御許小置させ給へる者ハ中古の誰ヤ一人ハ然
思寄て書せる傳ありけめども傳廿四三十一論云る
か如く實ハ其神ハ天より帥て降坐つる五十猛神
の御事少て御在坐せハ其御許小在程ハ決めて
暫時の事少て有けり此を四世迄も長く御許小留め
させ給ふことハ此大神の天

照太神の御爲小露も私の御行狀御在し坐ざる赤心
を覆ひ奉る事少て甚可畏し然れども此大神の得
せ給へる御劔ふれハ本より昔在り○今在於尾張國也
素多鳴尊許さハ云つ可事ふり
ハ第二一書ハ此今在尾張國吾湯市村即熟田祝部所
掌之神是也と有て即神名式小尾張國愛市郡熟田神
社名神と見えたる是ふり此所ハ御遷幸の御事ハ正
書ハ出たる草薙劔の御事を説奉る因ハ傳世三
十百
小註しつれども其御鎮座の較略を今註し奉るむ
ハ景行天皇四十年御紀ハ日本武尊更還於尾張即
娶尾張氏之女宮實媛而淹留踰月於是聞近江膳吹山
有荒神即解劔直於宮實媛家徒行之有是始ふり

古事記ハ故尔御合而以其御刀之草草那藝劔置其美
夜受此賣之許而取伊服岐能山之神幸行之所見なり
其委ハ事ハ寛平熟田縁起ハ倭武尊淹留之間夜中
入厠厠邊有一桑樹解所帶劔掛於桑枝出厠忘劔還入
寢殿到曉驚寤欲取掛桑之劔滿樹照耀光彩射入然不
憚神光取劔持歸告姫以桑樹放光之狀答曰此樹舊無
恠恠異自知劔光默然寢息其後語宮酢姫曰我歸京華心
迎汝身即解劔授曰實持此劔爲我床守時近習之人大
伴建日臣諫曰此不可留何者兼聞前程氣吹山有暴惡
神若非劔氣何除毒害倭武尊高言曰縱有彼暴神舉足

蹴殺遂留劔上道と有り風土記小熱田社者昔日本
武命巡歷東國還時娶尾張連等遠祖宮酢媛命宿於其
家夜頃向廁以隨身劔掛於桑木遺之入殿乃驚更往取
之有光如神不把得之即謂宮酢姫曰此劔神氣宜奉齋
之爲吾形影因以立社熱田郷爲名也と有り然れハ此
神劔を此小留めさせ御在し坐けるハ日本武尊京華
小歸赴らせ給ふとして其御形影として賜ひ置し
ありけり鎮座記小此年を四十一年の事と爲るハ實
小然る可し御紀の結め小是歲天皇踐祚四十三年焉と有ハ
其御葬の御事と竟たる所小之るありハ其ハ御紀四十

一年小當る可うむ事云ル更ふハ但鎮座記小四
姓家時天神教曰汝還都而可送吾劔者復此國思此地
者神風伊勢國之内玉垣國也云此以劔者宜留此
國若此訓有疑者懸劔於木明實證而當知有神光照滿
樹人者是驗矣或果知有光初驚賜と有ハ右の縁起風
土記等小異ふハ此小天神の御教甚疑ハ若此訓有
疑者云ハ殊小疑ハ此ハ日本武尊の廁ハ入坐
て業枝小掛させ給ひし忘置しハ有ハ
神の御訓の是非を試給ふハ其證ハ忘劔還入寢殿
到曉驚寤と有り著けられハ其事を神小爲むと
巧して作設たり者多けり又鎮座記小一日王曰
還都迎汝小止女答曰必哉未知虛實王仍解劔授曰持
此劔爲吾床之守以可待之時吉備武彦曰是不可留何
乎編伏而還都後送神劔宜敬祭王不用と有ハ此時の
狀然不有けむハ但還都後送神劔宜敬祭の文ハ上
ありハ此ハ御劔を留めさせ給へハ其宮酢媛命を
迎取給ふ迄の御形見の意ふハ其ハ氣吹山小御
然計り深く道理を云所ハ非ず

在_レ坐_テ神氣_ハ瘁_給へりけり_ハ御病坐_ル所の古事
記_ハ到_レ能煩野之時思國以歌曰_中略此時御病甚急_ル御
歌曰_表登_賣能登_許能辨_不和_賀游_岐斯都流_岐能多知_{其大}
曾能多知_{其大}波夜歌竟即萌_ト有_ル此事を縁起_ナり載_レ
て渡_レ鈴鹿河中瀬隨逝水_略下之所見_ナり此御歌ハ先_ハ
我歸_京華心迎_汝身即解_劍授曰寶持此劍為_我床守_ト
宮酢媛命_ハ宣_ヒ授_サせ御在_レ坐_一御事を思_ハし出
させ給_テ甚_ク其御名殘_ヲ惜_マせ給_ヘる_{御詠言}ハ
む御在_レ坐_{ける}奈_品ハ参考本_ハ載_ナる_{或本}ハ宮實
媛命後續御歌之末曰登_許能倍_不於_床和_賀於_保岐_美

能_{我大}君許能多知_子此_大於_岐多_麻倍_禮婆_置給_有岐
美能_{君之}美古止_乃麻_爾隨_命志_多比_也慕_慕麻_毛利_阿加_米
武_{守崇}登_古止_波爾_也常_石夜_須之_志津_加爾_也安_靜於_波瀬
波_{御在}可_許ニ_尔麻_都禮_波於_此處_岐美_毛君_亦美_古止
乃_麻爾_隨命_也止_下多_加倍_奈麻_志曾_違勿_麻毛_利於_波
勢_與守_可御_ト有_ル此_歌の_句法_明る_あら_{ざる}か_故
小_誰も_取り_見ざ_りけ_るハ_甚可_惜一_事あ_るを_以て
釋_紀の_例ハ_擬ひ_句毎_ハ譯_文を_加へ_て今_引り_此ハ_其
日_本武_尊の_御歌_ハ應_へ参_る意_を以_て床_上ハ_我
大_君の_此大_刀を_置給_へれ_ハ大_君の_御言_の隨_ハ慕_慕い

守崇め奉るむ常石小安く静まり御在し坐せ阿波禮
 此處小齋奉れらば大君も御命の隨小勿違へ坐て此
 床上小守り御在し坐べしと云意ありて此次小引る文
 小已而倭武尊奄忽遷化之後宮酢姫不違平日之約獨
 守御床安置神劔と有合て哀れとも憐憐しとる夫婦
 の真情をば盡し究めたる歌小あむ有ける偕御歌小
 も媛の歌あり登許能辨と有ハ上小引る縁起小謂ゆ
 る寢殿をきて床とハ御妹妹の御語くひ御在し坐け
 る夜床ヨドコの事あり先是倭武尊於甲斐酒折宮有戀宮酢
 姫即歌曰阿由愛智知何多比馮火加弥阿祢阿子古波我和例許年止

其四評家許思
 異自鴨歌本之枕
 行云宮所見來之
 之有小對を余衣
 形見下奉布細之
 枕不離卷七而在高
 座と有八床と云す
 了其其我我かり

許佐留良年也阿波禮阿祢古半可憐と有る登許是ふり万
 葉十八三十一小波之吉餘之都麻能美許登能許呂毛泥
 乃和可禮之等吉欲奴婆玉乃夜床加多左里下とも有
 か如く古夫婦の旅立する時ハ必夫婦相寢たる床を片
 去て傍小守り乍も其歸るを待つ習ありしを詠あり
 又十七十五小久佐麻久良多妣由久吉美子佐伎久安
 禮等伊波比倍須惠都安我登許能弊尔二十十八小都
 二麻波受可弊理伎麻勢登伊波比倍字等許弊尔須惠
 互之路多倍能蕪田遠利加弊之奴婆多麻乃久路加美
 之伎互奈我伎氣遠麻知可母戀年波之伎都麻良波と

諸古の比加弥阿称古
 神名式小愛智郡
 火止柳子神社に有
 る是なる由傳世也
 手九下注せし
 中鎮座記に永上
 宮三座宮實媛命
 豐浦宮御宇祭至
 唐野姬天皇壬子遷
 火高此時合祭神日
 本武尊也二座御靈
 形御宮二箇坐と有
 旧記に仲哀天
 皇四乙亥年始御
 鎮座と見申

有る皆床上を守りて齋へる状あり況て此ハ甚ル止
 事無き天神の御璽の大御劔を齋ひ置せさせ御在
 坐けれハ此ハ殊更なる御事小御在坐ける
 其十五卷ニテハ小須賣呂伎能等保能朝延等可良
 國尔和多流和我世波伊幣淑妣等能伊波比麻多祢可
 多太未可母安夜麻知之家年安吉佐良導可淑里麻佐
 牟等多良知祢能波ニ尔麻年之互等伎毛須疑都奇母
 倍奴禮婆今日可許牟明日可蒙許武登伊淑比等波麻
 知故布良牟尔等保能久尔伊麻太毛都可受夜也麻等
 字毛登保久左可里互伊波我祢乃安良伎之麻祢尔夜
 柙里須流君と有る家人の齋ひ待ねり云ひ結句小
 宿り爲る君と有る以て右の二歌の如く床上不思
 を居て祭る事を云ふ此等も傍證小備へて思ふ
 可く又縁起小己而倭武尊奄忽遷化之後宮酢不違平
 日之約獨守御床安置神劔光彩亞日靈驗著聞若有禱

不違平之約
 小引又小即解
 授白寶持此劔爲
 我床守と有る是
 小若て此

請之人則應感同於影響於是宮酢姬會集新舊相議曰
 我身衰老昏曉難期事須未^眞之前奉遷神劔衆議感之
 定其社之地有楓樹一^株自然炎燒倒水田申光焰不銷
 水田尚熱仍號熱田社之所見たるハ宮酢媛命其床上
 を供奉りて神宮を營造り神劔を奉遷る始あるハ右
 小我身衰老昏曉難期と有ハ甚く年老たる状あり
 此ハ其日本武尊の崩坐しより心勞れ身衰りれた
 りけりあめども未壯年の時ありけり鎮座記ハ
 四十三年^{一云四十}至經營大宮又媛曰合祭素戔鳴神
 九年己未
 分二種寶物宜奉藏土之御宮木之御宮又卜定宮地者

者以大神之勅造宮之制者宮柱太立高天原搏^搏風高知
奉遷^假熱田皇大神也も所見たる是めて日本武尊の升
遊ハ景行天皇四十三年癸丑あられハ其四年己未此神
宮を取建ベヨク非れハ一云の方正説少ク其四十九
年己未の^傳有ベク然れハ其媛の日本武尊小納れ奉
^傳る^傳四十年
^傳る^傳十六七の頃と見ても其四十九年ハ僅小二十
四歳ふ^傳し時^傳ころ右ハ謂ゆる熱田の名義ハ己未
傳二十五^傳六丁^傳小註り^傳 儲成勢天皇四十九年も同ト
昏曉難則^傳と云^傳小合る^傳如^傳く^傳あ^傳れ^傳ども^傳其^傳少^傳て^傳ハ^傳八十^傳余
の老女^傳あ^傳れ^傳ハ^傳其^傳言^傳實^傳ハ^傳相^傳應^傳へ^傳る^傳心^傳ち^傳あ^傳む^傳爲^傳る^傳を^傳猶
其^傳日本^傳武^傳尊^傳の^傳御^傳在^傳坐^傳さ^傳る^傳ハ^傳何^傳時^傳迄^傳ハ^傳床^傳上^傳置^傳て
守^傳る^傳可^傳き^傳ハ^傳非^傳れ^傳ハ^傳神^傳社^傳ハ^傳己^傳未^傳景^傳行^傳天^傳皇^傳御^傳世^傳小^傳始^傳り

緣起ハ神命
感其心授^傳神^傳智^傳
又賜^傳一^傳書^傳曰^傳若^傳有^傳急^傳
事^傳解^傳斯^傳書^傳曰^傳侍^傳武^傳
尊^傳拜^傳領^傳御^傳事^傳行^傳
と見^傳え^傳た^傳り^傳故^傳此^傳
一^傳神^傳

けし事申^傳り 右ハ二種寶物と云るハ古事記小故受命
も更^傳多^傳り 罷行之時參入伊勢太御神宮拜神朝廷略^中時倭比賣命
賜草那藝劍亦賜御囊而詔若有急事解茲囊口と有る
是^傳少^傳て^傳御^傳劍^傳と^傳御^傳囊^傳と^傳合^傳せ^傳二^傳種^傳の^傳神^傳寶^傳の^傳御^傳事^傳ふ^傳り
其^傳を^傳鎮^傳座^傳記^傳小^傳大^傳足^傳彦^傳忍^傳代^傳別^傳天^傳皇^傳四^傳十^傳年^傳合^傳詔^傳皇^傳子^傳降^傳
東國時天神語皇女曰神在高天原窺之東不守故有令^{ミヤハスニ}
平者必可來以吾劍可與無所向虜兵果詣王皇女取劍
與囊授曰慎莫怠也 一云此燧後天火徹燧名之 書せ
る此神託の事ハ一も先ハ^傳信^傳ふ^傳ハ^傳ざ^傳り^傳と^傳と
も熟思ふ不實小愛た^傳る^傳傳^傳り^傳て^傳有^傳け^傳り^傳其^傳ハ^傳草^傳薙^傳劍^傳ハ

一、其甚る可畏き天璽少て御在り坐り（又）其御燧火
も彼八咫鏡の御欽少て御在り坐す事傳せ一百二十丁小
註る如く少て共小伊勢太神宮の御許を放奉る可
しざる由縁の御物ふ（れ）然れば右小天神と有ハ皇
太神の御事小御在り坐て當昔東國小背叛者多
りければ征伐の御使として皇子尊を遣はし給へ
む小授賜ふ可き神託の如此く御在り坐る上あ
ハ其御姨の御心ふり任せ給はざる可きハ然る物
少て其若急事有ハ斯囊を開らせ給ふ可き由を仰會
めさせ給へる少て心懐ふも神託（ふ）の御在り坐る小本著

せ給へるふる可き事何ハ疑奉るむ然れば此ハ紀
記の補ハ將欲き程の事少しハ有ければ傳せ三百
丁の註せるハ如く後世と成て良ハ為れば論旨
小違ひ朝廷小背く輩の出来るハ多クハ東國ある小
此神劍の此小御在り坐て然る（驗）防禦を成て御在り
坐るハ實小天照太神の御心ありける然る時ハ此天
神の御諭ハ（れ）彼神武天皇戊午年御紀小天照太神
謂武甕雷神曰夫葦原中國猶聞喧擾之響焉（宣）吏往而
征之武甕雷神對曰雖予不行而下予平國之劍則國將
自平矣天照太神曰諾時武甕雷神登謂高倉曰予劍号

日部靈略と見え古事記の天照太神高木神二柱神
之命以召建御雷神而詔葦原中國者伊多玖佐夜藝帝
阿理祁理我之御子等不平坐良志其葦原中國者專汝
所言向之國故汝御雷神可降と有る其時の停ある者
あり今より後天地と日月と共小常在なる御世の
間小然る禍こ一々事（出必）出來よと云可う
されども熱田大神の此小若て御在坐す限ハ唯天
神御子の大御稜威あむ衰へさせ御在坐す限ハ
ける若る所以ふや依れりけむ世の甚く乱れたりけ
給ふ可う御力あむ及ばせ給ふさゆりけるを然る時小
ハ名將勇士を出給へる小織田豊臣の二公ハ其尾

張國小起給ひ東照神ハ參河國より出給へるハ更ハ
の亂を静め武徳を輝くとして朝廷の藩屏と爲り仕奉
る事皆偶然小非ず此大神の御靈小憑りし事右小出
せる尾張國小鎮坐す幽契の委しき事ハ己小傳世三卷
巴百十丁小祭神の御事ハ右の二種神寶を熱田
大神と称奉りて即天照太神小渡らせ給ふ事今更小
申奉る限小非ず雖も縁起小正二位熱田大神者以
神劍為主本名幽叢雲劍後改名草薙劍其祠立於尾張
國愛智郡と有て下小彼難川上の御事を書して此正
書の如く素戔嗚尊蓋鳥曰是神劍也何敢私秘藏乎獻於天
照太神也と有つて明らかり故鎮座記ハ熱田皇

授と有少著明きを又云く四十二年一云四十至經
 營大宮又媛曰合祭素戔鳴神分二種寶物宜奉藏土之
 御宮木之御宮と所見たる此時小天照太神素戔鳴尊
 を合祭る草薙劍小抱りて縁を御幽契の其始御在坐得させ謂れ依
 る事傳廿三十百丁小註るが如く此土之御宮と云ハ
 後代小朽損ハ此ツケテ爲り陶器して其草薙劍を盛
 奉りしツケテ後世小土用殿と申す其謂れ小依る事
 小有るべりりける又木之御宮と云ハ尋常の御箱ふ
 りめども右小上之と云が故小殊更小木之と並稱ふ
 りけり若て此ハ于正殿坐神璽者御宮也と有る其小

今其下神ハ小云るか如
 八御神社ハ小當宮
 別社ハ小給ハ小
 其攝社ハ小御社ハ小皇
 太神御靈ハ小宮ハ小
 坐ハ小有ハ小天ハ小
 由ハ小有ハ小神ハ小
 多ハ小尊ハ小御ハ小
 甘ハ小而ハ小坐ハ小
 天ハ小蒙ハ小謂ハ小
 今ハ小草ハ小薙ハ小
 明ハ小海ハ小道ハ小
 宮ハ小素ハ小戔ハ小
 由ハ小云ハ小
 難ハ小御ハ小
 人ハ小皆ハ小
 思ハ小

て御囊ふむ渡させ給ふ可うりける抑此天御燧ハ
 小傳廿一一百二十小註るが如く寶鏡開始章第二一書
 小是時以鏡入其石窟者觸戸小瑕其瑕於今猶存此即
 伊勢崇秘之太神也と見えたる其御欽少謂ゆるハ
 頭花崎の一片小御在坐ハ殊小天照太神の御靈
 として正殿小持齋き奉る事實小其謂れ有る御事小
 ふむ渡させ給へりける然るハ草薙劍ハも皇太神
 大神ふし係るを此御燧ハも右の由來ハ依り
 皇太神の御靈小御在坐す御事を思ふ可くハ諸鎮
 座記日割御子神社の下ハ一云燧而坐と云るハ此天
 火ハ徹ハるハ似ハたりハ然ハれハどハもハ上ハ件ハ小云るハ如ハくハ二ハ種ハ神
 寶ハとハしてハ草ハ薙ハ劍ハとハ並ハばハせハ給ハへハるハ上ハ無ハきハ神ハ寶ハのハ本ハ宮
 を離れて然る別社小御在坐ハ云理無れハ其ハ燧

事者一故同記一
御前神社三座
皇太神荒魂天照
坐大日靈尊合祭神
神素戔嗚尊共小
天神の荒魂を祀
る由あり又八咫神
を集説し素戔嗚尊
和魂也と云ふ鎮座
記西皇大神素戔
嗚尊と有れ此も
二大神の和魂を並
祭し其二大神の全
御靈を祀奉りて
て

故思ふ此草薙劔
形影して宮實媛
命の賜ふ所あり本
御在坐へき御事
申すも更あり二難
其本体の御靈と申
す時二大神の御形
やて日本武尊ハ唯
其を授生一のこ
有けれ其御靈とハ
申難事なり然
ハ鎮座記ハ水上宮
二座宮實媛命豊
浦宮御宇登之此時
合祭神日本武尊也
と有れ此二神ハ其
より後遷り此
可ハ遷播種命ハ別
社ハ今彦神社建稻
種命に有る其より
抄一祀へるあり
但其日本武尊を求
合祭れり持統天皇
御世と云れハ一別
社ありつゝ一合祭
たるとある可はハ
此所ハ坊ハ

石ふじあて同トく倭姫命より賜はる物ふかゞ顯
國の物ふれハ別ト社を定めて祀給へりけむ事傳せ
一卷百二十一丁小註る如く借右の土用殿を本
都知羊祢能美阿良可と訓るハ土御筈之御殿と申す
事ハ謂ゆる土之御宮を納奉れる謂ふる可ハ然
を神道者流の言ハ土金相生の義ありふと附會の
僻説然立るハ云ふハ足ざる者ありけり又秦鼎ハ頭
書ハ應神二十六年遷宮記作度用殿似是と云れども
其ハ土用を渡用小同音を以て然れハ熱田大神之齋
儀通ト書るあれハ其説も如何然れハ熱田大神之齋
奉らせ給へる主神ハハ天照皇太神ハ御在坐て
素戔嗚大神をハ合せ祭奉りてハ彼草薙劔ハハ
此二大神の神(實)御在坐て其二大神の大御正統
ハ渡らせ給へる天津日繼の御靈ハ御在坐す所
申すも更ふる彼天火微ハハ專皇太神のハハ係りけり
以ハハ依りけり故鎮座記ハ熱田皇太神一座略中

合祭神一座素戔嗚尊 御靈形御 相殿神三座 御靈形各
日本武尊宮(實)媛命建稻種命凡有五神次第如上同床
設別高座以西爲上于東次第焉元是二座也至于洋御
原朝加三座但相殿之内一機床別昇矣と有か如く宮
實媛命の始て齋奉りてハ二座ハ御在坐の餘の
三座ハ天武天皇の大御世より祭加へり趣あり
参考ハ承和十四年三月七日太政官符亦有(有)神体五
体語蓋是其一牀昇者蓋播種命所座歟と云るハ然
言ハふむ又鎮座記ハ前件神体崇正殿正体鎮土用殿
是以示無閑御扉設別殿渡天浮橋奉移五神獻四時祭

日本書紀傳 千六

〇主

故名其所曰渡殿五座御前各有神璽之御飾兵之有る
（是謂之本之御宮）
 神体と云ハ右の五神の御璽形御宮而坐之有る是ふ
のり
 の正体鎮土用殿と有ハ彼草薙劍小御在坐て即土
 之御宮是ふり是以示無開御扉と云ハ彼御正体ハ殊
 小重く貴き天璽小御在坐御扉を開奉る事を禁
 止て別殿を設け渡殿を架して別小安置奉る由して
 其別殿即右小謂ゆる正殿是ふり如此く正殿と土用
 殿とを別小して神体と正体との御座所を異小爲し此
 たるハ淨御原朝よりの御定ある可き事下小云るを
 見て知べきふり然るハ上小引る鎮座記小至經營大
宮又媛曰合祭素戔鳴神分二種寶物

△備此奈神を願注
 小大宮日本武尊
 素戔鳴神西宮
 實媛命今水上明
 神是之西伊時並尊
 比官福禰中央天照
 太神以上六座とある
 八異説して更小合す

宜奉藏土之御宮木之御宮と有て其藏奉る御宮を
 了ハ別小物爲し（此御殿を二小造り此たる）
 趣ありハ無きを思ふ可し縁起の趣ありハ漸く此時
 其媛の守り御床を放ちて別小社を定めし此たる
 のこの事と見えたる者をや天智天皇七年御紀小是歲沙門道行盜
 草薙劍逃向新羅而中路風雨芒迷歸と見えたる此事
 を縁起小天命閑別天皇七年戊辰新羅沙門道行盜
 此神劍將移本國竊竊入于神祠取劍（裏）裏袈裟逃去伊勢
 國一宿之間神劍自脫袈裟（裏）逃去還著本社道行更還
 到練禪禱請又裏袈裟逃到攝津國自難波津解纜歸國
 海中失度更亦漂著難波津中于時吏民驚恠東西認求
 道行中心作念若棄去此劍則將免捉搦之責乃拋棄神

劔劔不離身道行術盡力窮拜首自首遂當斬刑と有る
當昔佛法の盛あり頃あるが故に僧尼と雖も輒く
神社に詣て練禪禱請の事を物爲たりけむ然る
妖僧に盗され奉りし者ありけり其初度小伊勢よ
り自脱て歸せ給へるを次度小然爲させ給ふ可
きを其めても吏民の心著まじりけり今度ハ其
神劔の御方より其身を離れさせ給はずして妖賊を
捉搦しめ後の鑒誡と爲させ給へるありけり鎮
座記ハ天命開別天皇七年十一月外賊逃宮地山到筑
紫時大神靈驗賜國司女於是奉遷大神因都坐中略之所

見た多を合せて思ふ小其海中失度と云ハ已小筑紫
迄も到りけり可し古語拾遺ハ外賊偷逃不能出
境神物靈驗以此可觀と見えたるハ其筑紫より難波
津ハ漂著たるありけり于時吏民驚怖東西認求
有ハ妖僧の鏡術を解く頃間ハ猶得知ざりけりを此
小神劔の御在り坐ざるを以て始て東西小認求る小
も未彼外賊の所爲とハ思はざりつる小其漂著小至
りて己小術盡き事窮まりて自首せるありハ此ハ石
小云るか如く實ハ大神の御心とて甚く苦しめ惱
ませ給へるありけり此より其近江大津宮小留あり

御在_一坐す御事_小あむ渡_せ給_{へり}ける 右の大神
 司女_小有_ハ其盜去_れる事を託_し給_{へり}ける_ハ思_ふふ
 縁起_小夫_ハ東_西認_求る有_ハ合_され_ハ此時_ハ京_小留_奉
 る可_き御託_{ある}ハ_ハ諸_右の初_度の伊_勢より還_らせ
 給_ふ事を天_淵記_小俄_黒雲_從空_來奪_之有_ハ偽_ふり
 然_る著_明事_の御_在坐_たる_ハ人_ハ心_著て其
 外_賊を_ハ疾_ふ追_却少_可き_ハ然_るぬ_を思_ふ可_し同
 記_小人_取取_而到_近江_蒲生_郡黒_雲下_奪取_如先_云到
 筑_紫欲_飯本_國云_ハ有_て初_中後_三度_ハ爲_れど_ハ猶
 縁_起の_方あ_む其_國の_記録_あれ_ハ正_一く_有べ_し諸_右
 小_引る_縁起_小更_亦漂_著難_波浦_の下_小乃_或託_宣曰_吾
 是_熱田_神氣_也然_被欺_妖僧_殆著_新羅_初裏_七條_袈裟_脫
 出_還社_後裏_九條_袈裟_甚難_解脫_の四_十一_字有_り參_考
 小_此事_怪蓋_妖僧_託說_也可_削と_云る_ハ然_る事_{あり}
 鎮_座記_小靈_驗賜_國司_女と_有る_ハ右_の偽_託ハ_非ト_ク
 出_來へ_ハ事_小ハ_非ず_内ハ_其外_賊小_黨する_者の_有
 事_ハ託_{けて}皇_國を_伺へ_る小_奸吏_俗民_の私_欲小_耽り

自家_の富_を希_ふ至_りて_ハ彼_ハ畏_怖れ_て國_を治_り
 其_傲言_を信_として_勅小_皆淺_まり_事の_多在_り
 然_れハ_古と_て然_る妖_賊を_導き_て負_氣無_き事_共を
 成_{せる}賊_徒の_有け_るハ_こ了_然ハ_有れ_ど後_終ハ_天
 譴_の至_る事_を知_{ざる}ハ_若て_天武_天皇_朱鳥_元年_御紀
 本_{より}蠢_愚ふる_爲ふ_り若_て天_武天_皇朱_鳥元_年御_紀
 小_六月_己巳_朔戊_寅ト_天皇_病崇_草薙_劍即_日送_置于_尾
 張_國と_有り_縁起_ふハ_天淳_中原_瀛眞_人天_皇朱_雀元_年
 丙_戌夏_六月_己巳_朔戊_寅ト_天皇_御病_崇草_薙劍_即勅_有
 司_遷置_于尾_張國_熱田_社自_示以_來始_置社_守七_員一人_爲長
 六_人並_免徭_役と_有て_天智_天皇_七年_戊辰_{より}此_朱鳥
 爲_列並_免徭_役と_有て_天智_天皇_七年_戊辰_{より}此_朱鳥
 元_年丙_戌迄_凡十_九年_の間_ハ大_津宮_{より}淨_御原_宮小
 遷_奉り_て皇_宮小_御在_一坐_{ける}あり_鎮座_記ハ_朱鳥

△此新宮と云ハ
此時正殿御御
了之御甘未之御
宮共奉齋未未
を更土土用殿
を別告告其其
草薙劍劍之之御
宮を藏めめ別れれ
たり一一事事とと見え見
たり

元年五月庚子賜可奉還神劍於尾張國勅焉甲辰有神
與帝神約其六月戊寅帝御病復為崇神劍故即日勅
而奉還熱田宮焉此時更改經營大宮及別宮諸神社矣
十二月辛巳奉遷新宮と見えたり此小依る時ハ己小
此より以前小五月朔日小其勅の御在一坐けるを五
日小至りて愈廢社を起一て更小安置奉一る可き勅
約の御在一坐けるを猶豫ハせ給へりければ六月小
至りて御病一給へるあり然ける小其御崇に云ひ即日
小還奉る云ひ然速らハ出來ま事ふれども
其趣を以て先小己小還奉る可き豫ての事無くハ如

君の仰一十五年都小
留まり給り雖
も其草草薙神劍
の御事ハ外賊
の心懸ま可き
非ハえ神神宮
を動さ給りハ
帝の仰一奉り
りハ此小其神
劍の還奉り給り
少少給りての用心と見
えて

何ハ此所ハ至る可き儲縁起ハ社守七員を置る
由見えたりハ先ハ彼妖僧が盜奉ると云ハ其侍衛無
小出來ハ禍事ありハ依て其分番宿直ハ克給へる
者あり又鎮座記ハ吾神宮異麓也故有賊難ハ有を見
るハ其より以前ハ唯尾張氏の氏神ハ有ければ
宮造あどハ甚ハ事略たる事ありけむハ此事ハ懲
て其大宮造の狀ハ何ハ改りて正殿ハ土用殿ハを別
小別置るハ事ハ成り又同記ハ凡ハ有五神元是二座
也至于淨御原朝加三座ハ有ハ御事ハ有ハ御政ハ
不有ハ右ハ引るハ如ク御紀ハ縁起ハ本ハありハて
鎮座記ハ年月日共ハ合ハるハ扶ハ略ハ記ハ

但彼僧が神勅を
 持ててのいふ事五年
 都小留坐一程のハ
 已小神宮も結を
 かかあり記
 一御前神社の下云
 清御原御宇姑山女
 神勅因此号一御前
 神社宮中第一稱神
 也云々を以老可
 奉武尊の供奉社
 奉り云々鎮座
 記云々皇左神
 多馬尊二大神の荒
 鏡神うて御在坐
 すゆ水ハ後小念
 リて三度成され
 ありしなり

ハ天武天皇朱鳥元年八月以草薙劔送尾張熱田神社
 と有り御紀を稽ふるハ八月己巳朔丁丑爲天皇侍不
 豫祈于神祇之所見たる其事混ひたる少や又鎮座
 記ハ五月己酉於股名戸前庭燎會宮人汲神酒嚙樂而神
 祭故擧聲扇啞其感應天果遷座焉云事有ハ己酉ハ
 四日あり右小擧たるが如く己酉遷座の勅有ハ己酉ハ
 本國少ても其祭此より後ハ朝廷の御會釋あり猶正
 を行へるあり△
 一其事を得ざりけし古語拾遺所遺十一條を陳好
 ぶらわ其最第一ハ至大寶年中初有記文神祇之簿
 猶無明宗望秩之禮未制其式至天平年中勅造神帳中臣
 專權取捨有由者小祀皆列無縁者大社猶廢敷奏施行
 當時獨步諸社封祝摠入一門起自天降泊乎東征扈從
 群神名顯國史或詠皇天之嚴命爲實器之鎮衛或遇昌

懷秘ハ秘懷誤

運之洪啓助神器之大造然則至於錄功酬庸復應同預
 祀典或未入班幣之例猶懷秘外推之恨况復草薙神劔
 者尤是天璽自日本武尊愷旋之年留在尾張熱田社外
 賊偷逃不能出境神物靈驗以此可觀然則奉幣之日可
 同致敬而久代闕如不脩其禮所遺一也と有ハ上文小
 至於纏向日代朝令日本武尊征討東夷仍枉道詣伊勢
 神宮辭見倭姬命以草薙劔授日本武尊而教曰慎無
 怠也日本武尊既平東虜還至尾張國中略其草薙劔今在
 尾張國熱田社未叙禮典也と書さしけり其小應ハ
 る者なり彼御天降の初天璽とて共小天降とせ給

ひ瑞籬朝ミツに至る迄天皇の大殿の内ミ齋ハいれさせ御
在ミ坐マけるを其神威を畏オよせ給ひて彼八咫鏡ヤマトと共
小出ミ奉マらせ給ひ垂仁天皇二十五年小伊勢國五十
鈴宮小鎮坐マてより以降景行天皇四十年迄凡百十五
年一所ミ御在ミ坐マけるを放奉マりハ掛カまシ共ニ甚シ也
可畏シ云ハよクも綾小尊ニ貴キ天璽ヲ渡ルせ給ひて天
皇の御為ニ無シ上リ神寶ヲ渡ルせ給ひて事申す心
更ニふれハ伊勢神宮ニ亞テ天下ニ此神宮をコ崇メ敬ミ奉マり可クきハ伊勢の御事ニ於テハ形ノ如ク
禮典を脩奉シせ給へれども熱田神宮の御事ニ謂フ無

き諸國の神社ヲ後ニれさせ給へるふむ皇威の振レ
せ給へハ所以ニて神武天皇より以降景行天皇
の御世頃迄ハ謂フゆる天壓神トも申奉る程の御事ニ
て御在ミ坐マりハ次ニ小神氣の衰ヘらせ給へハ
如クて終ニハ武臣小皇威を奪ハれさせ御在ミ坐マ
て唯天神御子ト申奉るのみして天下の御事ニ於テ
ハ少クも御心ヲ任サせ御在ミ坐マざル當今ノ形勢ニ成
ぬるふむ專ニ此大神ニ係ル可ク事己ハ傳セ世三百十丁
也言舉リつるを猶又此ニ述ル者あり今ハ此事
を所知食一別ラせ給へ天神御子の御在ミ坐マて其禮

給へれども宮号ふと、奉らせ御在坐おし諸社
と共に己く神階の波汰有けり後紀小弘仁十三年六
月庚辰尾張國熱田神奉授從四位下、有る此事紀略
みも出たり此程の神階ハ其階改小應がひて位田を
進くも御定少く神位をの甲乙を朝廷より定めさ
せ給ふハ非ずと雖も然ハ云へ遺憾ハ御事あり
右の所遺十一條を録して進くはたる大同二年より
此小至りて十六年ふれども其建議の行ハれざり
事如此如何ハ淺く事ありやハ續後紀小天
長十年六月壬午詔奉授坐尾張國從三位熱田大神正

三位納封十五戸と有て此小至りて始て大神と奉称
くはれり然れども此ハ神階の三位小及ば給へる
を以ての事と聞ゆハ猶禮典の未能脩給へる者と
も見えず秦鼎説小從三位當作從四位正三位當作從
三位蓋傳寫之誤承和十四年三月七日及嘉祥三年三
月十一日太政官符并云從三位熱田大神と云るハ然
も有ぬ可き事あり文徳天皇實録小嘉祥三年十月乙
巳朔辛亥尾張國熱田神正三位と有り此小就て或説
小天長十年正三位を進給ひ一時小位記を奉り給
して此年小至りて奉り給へ故小正三位の重複ハ

大徳神社注進狀
 新國史曰寛平
 九年冬十二月廿
 朔甲辰奉授五畿
 七道諸神三百四
 座各位一階三有
 其中二加一拾八
 進奉一此時從位
 けり

あつむくさ云れども神階を授けて位記を奉せ給
 りずと云事や有べき参考の説慥ある據有て宜し
 きを得たりと云べし清和天皇實録小貞觀元年己卯正月
 廿七日甲申奉授尾張國正三位熱田神從二位と見え
 引續きて二月十七日癸卯授尾張國從二位熱田神正
 二位奉神位記財寶と有り此縁起向九百七十四遺正五位下守右中辨兼行式部少輔大枝朝臣音八其より後宇多天
 皇寛平二年小奏進ゆる故小其首小正二位熱田大神
 とハ書せるあり又紀略小村上天皇康保三年三月廿
 二日丁亥斬廊御ト尾張國言正一位熱田大明神自今
 月一日三箇日并十二日亥時社中鳴如大鼓乱聲同五

日夜振動如大鈴恠異也朱雀天皇有て此小至りて正一位の
 御事見えたり参考引る園大曆貞和三年文小天慶
 三年正月六日壬申進天下名神階位二禳東西賊と見えたり
 此其時正從一位進然給るる其天慶三年の事天下並てのより此康保三年
 事ふ別記可非也其取正位熱田大明神ハ
 の間正位進也給入右の恠異の事
 書者ありけり如此其神階の次第打合て外疑を容へさ
 小就て軒廊御トをり行り給ふ許の御事小て御在
 所無きを以て實小新國史の賜物と有けり
 坐せハ此時の御事め史籍傳りめ小
 有べき
 但寛平二年の縁起小正二位熱田大神と有
 進り給へ其より天慶三年の間從一位已ハ
 考右の文を載て下小正一位進階按
 園大曆在天慶三年如何則貞觀中授正二位至天慶進

一階爲正一位可知也或證神祇寶典爲康保三年恐非也云々然る可うす其頭書ハ從一位神階諸書不載之見尊命記云々ハ慥有て云々ハヤ予未其書を見ざる故ハ今ハ正史の上を以て論め云々の本國神名帳ハ正一位勲一等熱田大神宮一本ハ大名神と見えたり勲位の御事ハ升見當す雖も實若て神名式ハ熱田神社大神と載れ其名神祭式ハ熱田神社一座と有り然りと雖も其宮實媛命の祀初なる景行天皇四十九年己未より天武天皇御世まで一所祭二座あり又其御世より祭加三座をりて凡て五神ある事参考引る養和十四年三月七日太政官符ハ神体五体と有と云るハ本より朝廷ハ所知者させ御在ハ坐ハ名神祭式の如クハ其

中より唯一神の禮典ハ預々せ給ふ如く見ゆあり然れども此ハ五座神を合せて一座と爲るる事其例大和國大神大物主神社名神大月次相嘗新嘗ハ式文ハ一座あり注進次第記ハ依ハ所祭三座あるが如くして神ハ抱々幣敷を一前の分の奉る事ありめども餘社ハ有けめ此神宮の御事ハ似氣無ク御會釋あり古語拾遺ハ久代關如不脩其禮と有る其禮典を脩ざるハ非れども事略なる御事あり右の如く名神大社と申すの如くして稍々小祈幸國幣ハ預給ふ外ハ月次相嘗新嘗等の重大ある

神事ハ預_レセ給_ハズ朝廷の御會釋_ハ於_テハ甚其
意を得_ザル事_ハ多_ク在_ケル其事_ハ係_レ列_ヘル神祇
宮^官人の緩怠實_ハ神慮の御程も甚可畏_ク天朝の御爲
めも甚惡_ニ在_ル御事_ハ忠_ニシ_クシ_テ置_カル所置_カル所
鎮座記_ハ天武天皇朱鳥元年十一月辛巳奉_レ遷_ル新宮以
前下之永宣旨諸祭始勤行之故今有_ハ四時祭祈年祭新
嘗會之班幣^幣時奉_レ大宮及別宮并諸社幣^幣者賜_レ自_レ官庫奉
國內大小神祇幣者自_レ國司進_レ之又相嘗會神約祭者以
祇宜定勅使代賜_レ直廣貳位以_レ永宣旨令_レ二人宛一年爲
大使_ハ使_ハ並_ニ掌_レ月次相嘗大小祭也_ハ有_ル如_ク四時祭

ハ形の如_ク行_フ事_ハ本_ノ朝_廷の御祭ありと雖
も式文_ハ見_エたる如_ク止事無_ク列_ノ諸社_ハ祈年
月次相嘗新嘗等の幣帛を官_ノ頒_チ進_ル事_ハ
る_ハ右の如_クハ自_レ餘_ノ國幣と云_フ物あり又右の永宣
旨_ハ云_フ心得_ハ若_シ尋常_ノ國幣を_レ永宣旨_ハ云_フハ
其餘_ノ諸國ありを_レ永宣旨_ハ云_フ可_クハ此
ハ國人の位_ハ知_ラざる故_ハ其_ハを_レ此_上無_ク事_ハ
思_フ出_タる言_ハて實_ハ其_ハ正_ニシ_テ云_フハ式
の熱田神社を熱田神宮五座_ハ成_スれ並_ニ名_ハ神大月次
相嘗新嘗の幣例_ハ預_レせ御在_レ坐_レめ奉_ル也

其四時祭の度、ハ伊勢神宮と共ニ御使を以て奉
 給ふ御政を令り起給ふ御在り坐すしてハ
 掛あくる可畏キ天璽の御崇敬相立ず且崇神天皇御
 世鏡ハ二種共ニ改造し以て朝廷ハ留奉せ給ひ
 て護身御璽と爲て持齋奉せ給ひ劍璽と申して彼
 ハ咫坂瓊曲玉と共ニ須臾も御許を放たせ給はず讓
 國の御時ハ此劍璽授受の御事御在り坐て先帝ハ
 後帝あり此寶器を傳給ひて正統あり其事御在り
 坐すして私ハ立せ給ひむハ縱縦令天照太神素戔鳴
 尊ニ大神の御末ハ御在り坐て正しく天神御子ハ

紛無キ御血脉の中なりとも偽帝あり僭号あり
 事を得ず此ハ御摸造の御劍ありす然り況て此熱
 田神宮ハ御在り坐すハ眞の御物あり重キ事如何許
 う勝せ給ひむ是今神皇の御爲ハ赤心を吐露ハ
 奉りてハ得有まじき所以あり甚切可畏臨時祭式ハ
 社神税穀者社用之外不得用雖充社用申辨官待報
 有て此ハ朝定より萬ハ取賄ハせ給ふ如く
 甚愛た然れども其次ハ尾張熱田社毎年春秋二
 節節別屈僧六十四口轉讀金剛般若經一十卷其布施
 供養以神封物充之有て其神物を以て春秋の祭祀
 小ハ用ひずして然る禍ハ事ハ用ひ神慮の
 程如何有む甚可畏キ御事あり抑伊勢神宮の御定ハ
 子經經稱染紙塔稱阿良岐寺稱瓦菅僧稱髮長尼稱中
 髮長齋稱侍膳見え又別忌詞堂稱香燃優婆塞稱角

彦王小高座結御子神を第二子神哀天皇小當て違ハ
 ざる小似たりと雖も其ハ本末を知ざる定と云者ふ
 ツけり其ハ上ニ下云るか如く風土記小即謂宮篁
 姫曰此劔神氣宜奉齋之爲吾形影と有て其ハ日本武
 尊の御形見として留置せさせ給へる小こゝ有けれ
 其尊の持齋ヲ仕奉らせ給へる神劔小御在し坐て本
 よりの御靈ハ天照太神素戔嗚尊小御在し坐れハ日
 本武尊の御靈も相副て御在し坐ぬと云小ハ非れど
 も其小主客の違有る事小一有けれハ熱田大神を以
 て日本武尊とのハ打任せて云べくもざるあり斯

此ハ右の御兒神等三前の御事ハ外小求む可き道有
 る事申すも更ありり即熱田大神宮ハ右の二大神
 武尊宮篁媛命建稻種命を合せて五神ある事鎮座
記を引て註せるか如し然る小或説小今正殿二字相
並東西東殿曰土用御殿奉安置草薙劔爲日本武尊和
魂表也西殿曰正御殿配草五神中座日本武尊西二座
素戔嗚尊奇稻田姫命東二座宮篁媛命健稻種命也右
古一座也後以四神爲相殿と有鎮座記の旨ハ合ハ
ず草薙劔を日本武尊和魂表也とハ何を以云るハ
此ハ天照太神より天璽と引て天降し給へる御物ふ
る事申すも更ありり其御靈を齋奉るすと云事ハ
有へる中座日本武尊と云鎮座記ハ熱田大神一座
合祭神一座素戔嗚尊相殿神三座日本武尊宮篁媛命
建稻種命凡有五神次第如上同狀設別高座以西爲上
于東次第焉と有て一ハ天照太神ニ素戔嗚尊三小
日本武尊四小宮篁媛命五小建稻種命ありハ中座小
ハ當山といふ主神と申すハ非るあり然して西二
座素戔嗚尊奇稻田姫命と有て天照太神を漏せる事

本より誤あり且素戔嗚尊と女神と二座あり爲る事實
小然有る事あり凡彦神の相配ひ坐す
例あり其合祭神一座素戔嗚尊と云ふ屬て御在
坐るあり別座あり非ぬを一座と立る故天照
大神の御名を失ひて日本武尊を神名式小云く尾張
主神の如く思誤れる傳あり可く
國愛智郡日割御子神社名神大本國神名帳あり正二位
日割名神あり右鎮座記あり日割御子宮四座あり有て
下小日割前饒穗命粟彦命以上御靈形御宮而坐一云
燧而坐秋津鳥御宇祭之と有る心得ぬ事多し右の
如く八日前と饒穗命と粟彦命と燧と四座と云ふや
其日前ハ比佐伎ある可き其ハ下小燧而坐と有と
同体あり上三十の云る如く八咫鏡の御欽の謂ゆ

る天火徹燧ハル木之御篁小藏奉りて正御殿ハ御
在し坐す天照太神の御靈小渡らせ給へ此御社
小燧と云ハ若くハ燧石又ハ天火徹燧の御模造小
御在し坐す日割神と稱奉れるありて此神社の主神小
御座し坐故小御兒神と申奉る事其謂れ有る由己小
傳せ一百二十一丁小注るが如く次小饒穗命と申すハ天
孫本記紀饒速日命の下小亦名膽杵磯丹杵穗命と見え
粟彦命ハ其兒天香語山命の下小天降名手粟彦命と
有る其神ありて共小尾張連の遠祖あり秋津鳥御宇
祭之と有ハ孝安天皇の御世小其祖神とて持齋け

る社の有ける小景行天皇御世小熱田神宮を祀奉れ
る後其燧を此小合祭ゆるり此小主神と成て右の
二神ハ相殿神の如く成める者ある可し已く傳二十
廿一四十注せるが如く其(天)饒速日命ハ天糠
戸神小坐一花香語山命ハ石凝姥神小坐て共小彼ハ
咫鏡を造奉ゆる神小御在一坐せハ此小並坐す事甚
謂れ有りと思ゆるハ頭注小日割御子神社日本武
尊五男武彥王也母吉備穴戸
武姬吉備武彥女と有れども其ハ釋小此神宮を日本
武尊無跡と有ハ本著て其御兒神と有を便り小推當
たるハ非ハ又ハ然又同式小孫若御子神社名神
る社説の有を取ゆる又同式小孫若御子神社名神
本國神名帳小從三位上孫若御子天神と所見たり鎮

釋カ引る天書ハ
是後以天杵尊為
中國王と有し此小近
く又

此下ゆある八劍神
社十座の第一と大
耳尊の中一して天
志穂耳尊の御事
ちと相賜ひて
甚多なり

座記小火玉杵尊御靈御宮而坐と有り火玉杵ハ富能
多麻伎と訓ある可し神宮の古傳小豐受大神の相殿
小御在一坐す瓊ニ杵尊の荒魂の御名を天上玉杵尊
と書せられハ此ハ決く其亦御名小て渡せ給ひけり
若て其孫若御子神社と申奉る孫ハ天照太神素戔嗚
尊の御子天志穂耳尊小御在一坐一其御子瓊ニ杵尊
小渡せ給へれハ即其二大神の御孫小て渡せ給
ふ謂是あり若御子と申奉るハ熱田大神の御祖神小
御在一坐小對へて若御兒神ある由あり備又同例を
今一取出む
小ハ神名式小謂ゆる越後國蒲原郡伊夜比古神社名
神大一宮記小火香山命と有り其御父饒速日命ハ右

鎮座記高藏結
御子宮三座有
て下小國常立尊天
照地照神天御在
國御在神以上御
靈形御言而坐日
代言御言坐山之神
有山之神國常立尊
更小由無天御在
國御在神ハ風神不
リ何の故有と知
ず天照地照神ハ
天孫本紀天照國
照彦天大明神玉
鏡速日命坐云
ハ其ハ上る日
割御子神社ハ坐
世ハ三神共ハ心
得ず又云執田大
神與坐云鳴神立
坐言生子其三者是
素戔嗚尊之御子
云れとも叶ハ
思ハ之故思少ハ

の瓊ニ杵尊の御兄ハ渡々セ給ヘルハ其ニ大神の御
爲ハ御孫不リ其御子天香山命ハ御曾孫ハ坐故ハ
弥彦の義を以テ称奉ルハ此の孫若御子神社の例
ト等シキを思ハ可一頭注ルハ日本武尊七男稚武彦
王也母弟媛穗積氏忍山宿禰又同式ハ高座結御子
サト見えたるハ如何有む
神社本國神名帳ハ正二位高藏名神ト作り傳廿一
五下ハ注ルカ如ク神名式ハ河内國高安郡天照太神
高座神社二座並大月次新嘗丹波國氷上郡高座神社
何鹿郡高藏神社ハ共ハ高倉下命ハ御在ハ坐テ謂ゆ
ル天香語山命ハ御在ハ坐事天孫本紀ハ見えたるカ
如ク然ルハ高座結ト申す結字を牟須毘ト訓來ル事
ハ有れども凡テ某産靈ト申す御名ハ各其產生す

料の物有テ其を產生す御徳の御在ハ坐ハ因ル事
以テ火産靈神津速産靈神との如ク火を產生ハ津
液を產生ハ坐ル謂是ハ然ルハ此の高座ハ謂ゆる
倉庫の事あれハ其を産靈ト云事理ハ於テ有ベク
ざる者ハ故思ハ結字ハ高倉下の下字の如ク訓
ベクハヤ然ル例ハ外ハ見當ルハ續紀第一詔
小務結而第二詔ハ弥務ハ結字第^三詔ハ勤結^理ト
有を鈴尾大人の解ハ類史詔ハ務ハ志麻理三代實録
詔ハ務志万利ト有る例證を引テ志麻理ト訓ルハ
ハ依テ強テ思寄ルハ結字の本訓志牟ハ其略

△イハ八十秋取講
出たる天香語山命
の兒天忍男命

△鎮記の趣
也天孫本紀の三世孫
天忍男命天忍男命
命天忍男命三柱有
り若くハ其

訓志ありハ高倉結ハ高倉下と同訓あり其御子と申
すハ天孫本紀小出たる天香語山命の兒天村雲命
どハもヤ有るむ其ハ右ハ引る天照太神高倉神社の
下ハ元号春日戸神ト有ハ同郡春日戸社坐御子神社
式小見えたるハ其少ても高座御子神ト云名ハ出る
事あるを合せ思ふ可くハ然れハ此ハ尾張連の祖
神あり其神宮小取て御兒神トも稱へつ可ハ御事
あり
天孫本紀ハ天香語山命其子天村雲命
其子天忍男命ト三世ありハ秋家譜ハ
ハ天村雲命ハ無くして二世ありハ方ありハ可
右の如く考合せ見ると此ハ社の中ハ一ハ瓊杵
尊の渡り給ひ一ハ饒速日命ハ天香語山命ハ坐
ハ其天香語山命の御子神トして此ハ二社ハ尾張連の

祖神等あり本國ハ春日部郡有ハ河内國ハ春日戸社
有て其事の打合多を以て予ハ強クハ非ハ事
曉可一頭注ハ日本武尊第二子仲哀天皇ト書せ
れハ此ハ天皇をハ高座結御子神ト申奉る可ハ所
由ハ更ハ且て
ハ無事あり
○熱田大神御兒神右の三社の外ハ殊
小重ハ神名式小出たるハ八劍神社是あり本國神名
帳ハ正一位ハ劍名神ト有て神階の事ハ見及ハすと
雖ハ當郡の内ハ極位ハ進ませ御在ハ坐マハ唯當
社ト本宮との二所の御在ハ坐マ是ハ殊ハ勝ハ
て貴キ御事をあむ思ふ可ハりける熱田尊命記ハ新
嘗の外ハ諸祭ハ皆此社を先ト後ハ大宮諸神を祭
るト云るハ伊勢少度會宮を先ハ皇太神宮を後ハ

被祭る事等しき事して殊少縁ふゆ所以有る事
 と見えたり天野信景が集説小熱田大宮南或称下宮
 和銅元年九月鎮座素戔嗚尊和魂也按書紀蛇頭尾各
 有八岐云云斬至尾有一劍名草薙之劍神名式出雲國八口
 神社風土記并築社記大原郡斐伊郷中鞆川邊有杉八
 本祭蛇頭仁田郡田作尾原村祭蛇尾乃石壺大明神是
 也風土記未官知由是見之則八口称頭有八岐也八劍
 称尾有八岐也神劍出於出雲國奉尾張國謂此熱田上
 宮和銅帝建別宮称下宮者盖有故歟又當社所攝有八
 子神社子與口傳訓通疑移祭出雲國八口神以爲頭尾

其八鎮座記御前
 神社二坐下有下小
 皇太神荒魂天照
 坐大要貴尊合祭
 神素戔嗚尊等坐
 御聖形御尊而坐記
 日代宮御宇荒魂
 宮建之別祭荒祭
 神云清御原御宇
 始安神劍因此号二
 御前神社言中葉一
 攝神也之有之此御
 前を向良美佐伎と
 訓て天神の荒魂と
 御在坐す由あり
 然ハ本宮御座の
 御聖ハ坐一御座
 神社ハ八劍神社ハ
 其荒魂和魂ハ坐上
 て共ハ天神ハ坐上
 る御事あり可也

配合乎其實共出素戔嗚尊靈德也略と云り此御神を
 一素戔嗚尊の和魂と申し和銅帝別宮を定て下宮
 と称けさせ給へる由云る此二條の古記あり有
 を取て云る説少て必受る所あり有べりけし但八
 口神社ハ實ハ八岐大蛇を祀れるあり有べり此の八子神
 社を一ハ爲るハ信難くや侍ると思ふハ八劍ハ弦劍
 少て眞の草薙劍の御在坐上小其御摸造の御劍
 を作られて更ハ別宮ハ被祭る称少て劍八口の謂小
 ハ非多可くあるト部兼邦記ハ日本武尊還御の時小
 奇瑞有ハ依て尾張國ハ大社を令造
 給ふ今の熱田明神是ありハ劍宮是ふり其以後新羅
 國の僧日羅と云者此劍を欲かり彼宮ハ參籠日久

一可然子便宜を以て御殿を破り己の盜取り逃行く
 と思へば宮中を一夜程巡る許あり夜の明たれぬ
 を返して捨て逃ぬ此の依て同トす尺の大刀を七振打
 せて同殿に置給ふ以上八振ありと云る此ハ彼神劍
 の外小作添たるを合ち八劍と云由と聞ゆ然れど
 右の目羅ハ推古天皇御世の僧の非ず其ハ
 道行を誤れり又天淵記あり道行ハ初度盜めり
 時ハ俄黒雲從來奪之と云ひ二度ハ到近江蒲生
 郡也黒雲下奪取如先と云て其三度の所ハ又還熱田
 作劍八枚奉代今未社ハ劍宮也と云れり然る妖僧
 の作れり物を以て此下宮の神体小爲べり非ずと
 雖も右の二共小其事の有し小就て御摸造の出來れ
 る事ハ知れり又鎮座記ハ八劍宮十坐と有て下小大
 八洲之安國知食大耳尊西皇太神素戔嗚尊東佐曾良
 比坐神姬大神以上御靈形御筥而坐古清御原朝立神
 約而有祈百王鎮護是以至和銅元年始祭此宮也と有

此大神ハ彼神劍の
 御事ハ取らまじ
 大神ハ所ハ給ふ
 同記御前神社
 皇大神素戔嗚尊
 又内之遙拜七社の中
 素戔嗚神社坐神
 録ハ西ノ社ト有
 一位素戔嗚神社ト
 見えたり是より左國
 神名帳ハ從一位素戔
 嗚名神ト出たり此下
 小ノ社ハ八劍神社
 の神ハ坐あは甚
 深故有る御事ハ
 見えたり

此說實不然可く其大耳尊と申すハ天孫降
 臨章第七一書小(云)勝速日命兒天大耳尊と有て即
 天忍穗耳尊の御事小渡せ給ひ次小皇太神素戔嗚
 尊二大神ハ其御親神小御在坐一又上小云る孫若
 御子神ハ御父子の御間少く渡せ給へるふと旁
 由有る御事少り次小佐曾良比坐神と申すハ大祓詞
 小謂ゆる速佐須良比咩神の御事と聞ゆ此ハ素戔嗚
 尊の和魂神小御在坐す由傳八九十三百七小注
 せる如くふれハ集說ハ當社を素戔嗚尊和魂也と云
 るハも暗合り但當社十座の數を以合する小祓戸

神四柱共小並坐と見えたり如何小爲て此四神の
 御在坐ずと云小天武天皇御世小草薙劍の御崇坐
 し頃小其罪を謝申さるる事當りて解除の御事ふと
 の御在坐ける故小有べ次小姫大神と申奉る
 小謂ゆる三女神小御在坐て天照太神素戔嗚尊二
 大神の御誓小成坐る神あり此より祭する可き御
 事あり事斯は大耳尊天照太神素戔嗚尊後戸神
 四柱三女神等合せて十坐あり者あり和銅元年始祭
 此宮有る事とハ其書入小和銅元年九月九日戊丑多治比眞
 人池守爲勅使初奉稱ハ劍宮と見えたり是あり
 細川
 玄旨

法印の東國陳道記小日本武尊たる由云り然れども
 傳廿三卷三百三十一丁小注る如く本國神名帳小
 知多郡從三位須男神社有リ天野信景集説小須佐村ハ劍
 宮與と云ハ謂はたり言はて其須男名神ハ素戔嗚大
 神坐カ故は後ハ劍宮と号けたり事其小
 知ハ此社の主神を其大神と專古云けり事を
 一ハ徹神社ハ霧神社の攝神三所坐りハ八子神社
 三ハ女神御靈形御宮而坐と有リ其五男の第一大耳尊
 小自餘の神を祭る就て合祀へる事御座御座皇
 太神御靈形御宮而坐と有ハ上二十九丁ハ云る事
 小正御殿ハ御在坐皇太神の御休謂ゆる本之御
 宮ハ彼御靈を藏奉りて天火徹燧其中小御
 在坐ハ此ハ徹神社と崇奉りて本宮の遙社と
 小爲つる事此ハ霧神社素戔嗚尊御靈形御宮而
 坐と有る霧ハ此正書小草薙劍の御事を本名天薙雲
 氣蓋大蛇所居之上常有雲氣故以名與と有る謂はて
 此ハ本宮小御在坐素戔嗚大神の遙社と有る謂はて
 坐す事あり可き思はゆ然れハ上云るが如く此ハ劍

日本書紀傳 二十六

〇五十二

吉備前兒島郡是ふり神武天皇御紀乙卯年小徒入吉備國起
行宮以居之是曰高島宮と有ハ神名式小謂ゆる備中
國小田郡神島神社是ありと云り古事記黒田廬戸宮
殷小大吉備津日子命與若建吉備津日子命二柱相副
而於針間氷河之前居忌荒針間爲道口以言向和吉備
國也とハ後の三備と美作を合せて云りと思ふ小崇
神天皇十年御紀四道將軍を被遣る所小吉備津彦
遣西道と見えたるハ其ハ山陽道の惣てを言向ハめ
給へるか備前ハ其京より到る始の地あるを以云小
て然のハ限ゆるハ非ず景行天皇二十七年御紀小

到吉備以渡穴海と有ハ和名抄郡名小備後國安那夜
那と有る是少て夜須奈字小就後の唱つて舊号阿那ふり
又應神天皇二十二年御紀小天皇便自淡路轉以幸吉
備遊于小豆島庚寅亦移居葉田葉田此葦守宮時御友
別參赴之略中因以割吉備國封其子等也則分河島縣封
長子稻速別是下道臣之始祖也次以上道縣封仲子仲
彦是上道臣香屋臣之始祖也次三野縣封身彦是三野
臣之始祖也復以波區藝縣封御友別弟鴨別是笠臣之
始祖也即以苑縣封兄浦凝別是苑臣之始祖也即以織
部縣賜兄媛是以其子孫於今在于吉備國是其縁也

（四）有る始の幸吉備ハ其大名を指て云ふリ、小豆島ハ
續紀小備前國兒島郡小豆島と有リ、葉田葦守宮ハ和
名抄御名小備前國上道郡幡多備中國賀夜郡足守之
毛と有る是あり、川島縣ハ通證不疑即下道郡と云ヒ
利と有る是あり、之毛豆と有る是あり、上
下道ハ同抄郡名備中國下道美知
道縣ハ郡名備前國上道加無豆香屋臣ハ備中國賀夜
有る是あり、三野縣ハ郡名備前國御野美乃有リ、波區藝
縣今未詳、笠臣ハ郡郷名小見えず、若くハ備中國小田
郡小笠園の地名有リ、其ノ苑縣ハ郷名備前國下道郡
曾能是あり、織部縣ハ郷名同國邑久郡服部波止備中

國賀夜郡服部波止と有る此中何れカ其ふる可ク若
て其結句今在於吉備國也と有ハ上件備前備中を
合せて然云あり天武雄略天皇七年御紀遺樟使臣擊手吉備下道臣
於吉備國又其十一年七月ハ是日信濃國吉備國並言
霜降大風と有る此二ハ前カ中カ後カ見知カ
水カれカ多くハ打任せて吉備國と云カ備前カふる
か如く見えなカつける然カ此カ今カ在カ吉備神部許也
と有ハ備前國を云と聞えたり故上件小擧カなるカ如
と云たりカなるカ小應神天皇御世頃迄ハ三國を合せて
吉備と云ける中カハ備後ハ己カく阿那國カハ品治國
と云カけりカハ大名カより外カハカ云カさカりカけカりカ仁德
天皇御世小吉備中國と云れハ其程カより三國カハ成

れりけめどル國造本紀ハ吉備中縣國造瑞籬朝御世
神魂命十世孫定賜明石彦國定賜國造ト所見ナルハ
其項より其吉備國して大凡の差別ハ已小出來ル
しあまを此仁徳天皇御世ハ正しく備前備中備後
の國名の定まりけめども其中ハ凡てハ係ハ
らぬ事ハハ上道國下道國ども云ハ又吉備上道
國吉備下道國とも云ハ廣くハ唯ハ吉備國ト云テ後
世ハ如クハ細クふる事ハ非リけるハ所見ナリ
○神部ハ迦牟登母能衰ト訓リ即神伴男の義あり其
伴男ハ伴長少テ其部の長々々々人を云ふ此事天孫
降臨章第二一書五部神の下小傳廿二 百 十 小云ベ
一儲此神部の例ハ推古天皇十年御紀小來月皇子爲
擊新羅將軍授神部及國造伴造等并軍衆二万五千人
略ト有る此ハ諸ト有れば想テの神祇官の人を云

る事あるカ肥前風土記ハ三根郡物部郷在郡此郷
中有神社名曰物部經津主之神也曩昔小墾田宮御宇
豐御食炊屋姫天皇今來月皇子爲將軍遣征伐新羅子
時皇子奉勅到於筑紫乃遣物部若宮部立社於此村鎮
祭其神因曰物部郷ト有る物部若宮部此ハ引合リ其
物部ハ神号あり若宮部其ハ仕奉ル神部ハ諸
ト有る其中の一部トハ聞え其諸神部の事ハ下云々ト考テ持統天皇五年御紀
小十一月戊辰大嘗神祇伯中臣朝臣大島讀天神壽詞
略中丁酉饗神祇官長上以下至神部等ト有る神部ハ次
小引る職員令神祇官のある是あり其若宮部ハ就テ
思出けらるハ姓

氏録山城國神別天神小神宮部造葛城猪石岡天降神
天破命之後也六世孫吉足日命磯城瑞籬宮御宇天皇
御世天下有災因遣吉足日命令齋祭大物主神災異即
止天皇詔曰消天下災百姓得福自今以後可爲宮能賣
神仍賜姓宮能賣公然後庚午年籍註神宮部造也有
ハ大物主神を齋奉れるハ因て姓神宮部造を賜ひけ
る由あり此を以て見るハ若宮部ハ其物部神社を齋
祭する部ありを以て其を以て此神部の職掌をハ知
るハ職員令神祇官小神部三十人ハ有り然れども其
職掌を注さずと雖もト部二十人使部三十人の上
小在り祝詞式之首小凡祭祀祝詞者御殿御門等祭齋
部氏祝詞以外諸祭中臣氏祝詞と有て次小凡四時諸
祭不云祝詞者神部皆依常例宣之下略と見えたるを合
考する此神部ハ中臣氏人を云ふり又儀式祈年祭儀

小供神の調度の事を神祇官忌部官一人監造若官内
無忌部官人及神部之中忌部不足八人者兼取諸司氏
人充之ハ有る此ハ忌部の氏人を云ふり神祇令神祇
官中臣宣祝詞忌部班幣帛の義解ハ其中臣忌部者當
司及諸司中取用之ハ有る是ふり然れども上世ハ
其餘の諸氏の中よりハ奉れると見えて古語拾遺
小凡造大幣者亦須依神代之職齋部之官率供作諸氏
准例造備然則神祇官神部可有中臣齋部ハ振女鏡作玉
作盾作神服倭文麻績等氏而今唯有中臣齋部等二三
氏自餘諸氏不預考選神齋亡散其葉將絕所遺十也考

と見えたる。此ハ其天石窟段（高皇產靈神の神議小）宜令太玉神率諸部神
造幣帛（中）と有。小本著て其御天降段（天照太神の御命小）宜令太玉命率諸部
神供奉其職（中）如天上儀。仍令諸神亦與陪從。と有を兼け
神武天皇段。小令天富命率供作諸氏造（中）大幣と書せる
所を述て神代以來の故實を云わたりたる者あり。然る時
ハ神部ハ中臣氏（神事小就）ふど（神事小就）の祭祀。小預り仕奉る氏人ハ更
あり。忌部以下（神事小就）の供作（神事小就）る氏ニを凡廣く云稱あり。を令
の御定出來りてハ神祇の被官。小神部三十人。と被定
てあり。又其諸氏の人をも其部（供作）小擔任仕奉る事あり
し。を己ハ大同の頃。ふハ中臣忌部等の二三氏。小成り

貞觀延喜の頃と成てハ。僅ハ中臣忌部の二氏と限る
事。ハ成りたる者ありけり。然ハ纂疏ハ神部者掌
神事而有其黨也。と註されたる御説ハ。猶宜ひ足ぬ心
ちり。爲る。大抵神部と祝部（神祇小供奉者あり）ハ似たる者あり。同ト
あり神部ハ神祇の官人（神祇小供奉者あり）として朝廷（神祇小供奉者あり）に在りて諸社の事
を行ふ者あり。祝部ハ諸社（神祇小供奉者あり）に在りて朝廷（神祇小供奉者あり）の神事を行ふ
者あり。義式祈年祭儀（神祇小供奉者あり）ハ。忌部二人率神部二人進夾（神祇小供奉者あり）案
立監領（神祇小供奉者あり）。神事史（神祇小供奉者あり）。次唱御（神祇小供奉者あり）。及諸神祝（神祇小供奉者あり）。各稱神部執幣
領之。と見え。又祝部の事ハ。職員令神祇官（神祇小供奉者あり）。説部義解（神祇小供奉者あり）。小
謂爲祭主（神祇小供奉者あり）。賛辞者也。其祝者國司於神戶中簡定云々と
有て職掌異あり者あり。○吉備神部ハ右ハ註せる神代（神祇小供奉者あり）
り思混ふ可く。○吉備神部ハ右ハ註せる神代（神祇小供奉者あり）
男と訓む常のハ異りて。迦牟倍と訓む可く。して此
ハ必しも姓ありけり。其ハ地神本紀ハ素戔嗚尊十一

世孫大鴨積命此命磯城瑞籬朝御世賜賀茂君姓次大
友主命此命同朝御世賜大神君姓次田田彦命此命同
朝御世賜神部直大神部直姓之有是少鴨部と同
一意あるあり其鴨と云ル神ある義ハ己小傳十五
十六小注るか如攝津姓氏録和國神小鴨部祝賀茂朝
臣同祖大國主命之後也有て其賀茂朝臣の部あり
けり然る小大和國神同録別地祇小賀茂朝臣大神朝臣同
祖大國主神之後也大田田根子命孫大賀茂都美命一名
大賀茂奉齋賀茂神社也と見えたるを大三輪神三座
足居鎮座次第小葛城賀茂神社略大賀茂祇命兼勅立社於

葛城邑賀茂地奉齋事代主命仍賜賀茂君氏之有て即
神名式小謂ゆる大和國葛上郡鴨都波八重事代主命
神社並名神大月是あり然るを和名抄郷名小備前國
赤坂部葛木之有り神名式小同郡鴨神社三座之有り
是鴨部の人の大和より移りて吉備神部たる所以小
又神名式小同郡石上布都之魂神社御在坐て此
劔の鎮坐す由あり小郷名ハ其隣ある邑久郡石上伊
美乃加又同郡美和神社赤坂郡宗形神社ふと御在坐
ふと共小鴨部の祖神小して愈吉備神部の所在を知
る便此小在る者ありけり若て神功皇后元年御紀小
吉備臣祖鴨別と云人名見

えたり國造本紀小笠臣國造輕島豐明朝御世元封鴨
別命八世孫三枚臣定賜國造と有と同一人あり可し
此鴨別の名も右の鴨神社の鴨より出たる事論を待
ず然る時ハ崇神天皇よりハ後神功皇后よりハ以前
小己く其氏人の北地小
移り住ひぬるありめり
○今在吉備神部許也傳廿六
四下小己小注るか如く第二一書小其斷蛇之劍号曰
五下蛇之鹿正此今在石上也と書され古語拾遺小此今在
石上神宮と所見なる小此の功くハ其所在相違へる
小似たり此小説有り記傳九
四下小石上ハ在吉備神
部許也と有るハ備前國赤坂郡石上布都之魂神社
是ありと云り一應ハ誰も然思ハるれど熟思へば然
小非ず其故ハ然しも名高き倭ふるを除て吉備ふる

を唯小石上とハ云てむや若吉備のふるハ必吉備石
上ふどこころ云べけれ然れハ猶倭の石上ふる可し
推
儲推度て云ハ書紀崇神天皇御卷六十年小矢田部
造遠祖武諸隅を御使として出雲大神宮小藏れり神
寶を召上て見給ふ事有り矢田部造ハ姓氏録小依小
物部氏の別あり儲垂仁天皇御卷廿六年小物部十市
根大連小詔して出雲の神寶を檢校しめ仍て神寶を
掌るし心又八十七年の文小同人石上の神寶を掌る
事見ゆ然れハ此復佐之男命の御劍出雲神宮小藏れ
りしを右の崇神天皇垂仁天皇の御時ふど餘の神寶

と共小京小召上給ひて其時よりや石上ハ納め
れたりけむ此石上ハ猶種々の神寶を納め
事無仁天皇御卷小所見たり儲後ハ所以有て備前國
ハ遷一奉りある可し其時倭の本宮の名を取て彼
處を石上布郡之魂神社トハ申すありむ如何ハ在
れ右の神名ハ必倭より出たる事明^ミきや斯^ニハ書
紀又拾遺ハ在石上ト云るハ初倭小坐一時の傳へ在
吉備ト云るハ遷給ひて後の傳ある可し然る小備前
の石上社傳説ハ神劍ハ昔大和の石上へ遷一奉て
此社ハ座坐す略^下ト云れたるありむ目覺る心ち

甚委^トき説ふりける社記小問是何神許哉答未知其
上山是^也如此文者寸^{爲何神也問下文云出雲歎之川}
吉備與出雲其國各異也今何得之相近哉答未通者也
石上布郡之魂神社ハ今神劍の傳ハ云有て素戔嗚尊の斬蛇
備中國吉備津社ハ十握劍ト云有て素戔嗚尊の斬蛇
の神劍^ハ由云傳ハ吉備神部許小御在坐
云成就蛇の古劍を其事儲此神劍の御事上ハ借
小取成せる者疑ハ素戔嗚尊許云^ハ如く神代より以降出雲大神宮
小御在坐一神寶の一種ハ不渡^レせ給ひけむを宗
神天皇六十年小京小令獻給ひて大和の石上神宮小
ハ祀奉^ルせ御在坐^ケ其より吉備神部許小御
在坐一由來ハ右小云る如く其御世小葛城賀茂

其時石上神宮
小出雲建推神
社小御靈を留祭
しけむ事傳廿
五冊に注るが如

神社を始て祀ハセ給ひ其小就て賀茂君の氏ハ出来
又其賀茂君小就て鴨部ふむ出来りけむを其素
茅鳴大神の御齋カ一有れ其氏人小就て令祭給ハ
し事を諸給ふ由の神託あど御在一坐けむ其田田
考命小神部直大神部直の姓を賜ハせたる其御時
の事ありければ彼赤坂郡鴨神社三座ハ其神を奉
て氏人の移住ふ就ての事少く此断蛇之劍ハ一
謂ゆる石上布都之魂神社ハ遷一奉りけり然
るを其石上社傳小云るが如く神劍ハ昔大和の石上
へ遷一奉りて此社ハ座坐すと雖も猶其神社を氏

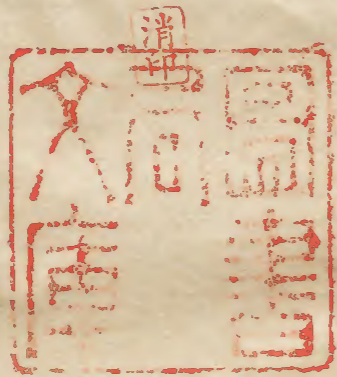
人の奉仕れる事猶古の如くあり一故小此ハ今在
吉備神部許也と云ふ傳説有り又地名ハ邑久郡石
上郷ハ遺れる者ありけり然る故小第二書ハ此今
在石上也と有ハ傳の異あるが如くあれども御紀の
奏上有し養老四年のハ八十八年後の大同一作
年ハ出来る古語拾遺ハ今在石上神宮と有るハ後
小大和小還り鎮坐一事著明き者あり記傳ハ云れ
るか如く然一も名高き大和あるを除て吉備あるを
唯小石上神宮ハ書さしむべき事あるをや此時の
御事ハ因れるハ非トウ神名式小備後國安那郡多

祁伊奈太伎佐耶布都神社と有り其供奉ハカテ往還ハカテの間
小暫時少く留め奉れりし御迹ふと少や臨時祭式
小凡石上社備後國封祖穀者收社家克夏冬祭料と見
えたるも斯る所以の無くハ然る神封の御在坐へ
くも非ぬを思ふ小其多祁伊奈太伎ハ傳世三百十
小註せる音カク福田ハカ媛命を久志伊奈太伎比咩神と申す
本名小御在坐セハ多祁伊奈太伎比咩神とも申
せり少く此大蛇を退治させ給へる小由有る神小坐
小佐耶布都神ハカ佐夜ハカ清部神ハカ少く佐夜ハ劍ハカの利
少く其光の甚能く清亮たるを以て括へたる少く

此断蛇之劍の一名少く御在坐ハカ其深津郡小須
佐能袁能神社御在坐其ハ三代實録小授備後國
正六位上天照麻良建雄神從五位下ハカ有る即此神ふ
る事傳世三百三十五丁小注るハ如く斯れば其大和の石
上神宮小出雲建雄神社坐るも此大神の神劍の御靈
を祀れる事更小疑ふ可くハカずあむ有ける然るハカずハ
石上社小備後國小御封有る可き所由更小無る可き
御事ハカふハカ但此ハ在吉備神許也と有ハ右の赤坂郡
如くハカ此備後國ハ京ハカ御在坐ハカ道ハカあり
ずと雖も右の備前國の石上小御在坐ハカ由有
て大和へ遷ハカ奉るハ猶其近國ハ鎮奉る官所求た
りけむハカ此上暫くハカ其神劍を留め奉れりし

り大和小還一奉れ後も此小神社を定めれて其御靈を祭れ先小當社少封田あり一所をも大和の本宮小隸て其石上神宮の御封ハ被定ける小こころ○其斬大蛇之地則の此七字諸本共小無くして文を成さるを通證小或曰春日所藏古本出雲上有其斬大蛇之地則七字と云ハ甚愛たき賜物と思ひし一本を得たる小御校正本と云小此七字有リ云ハ然る全本の世一二有る事を知て今補ひつ否くさる時ハ上小今在吉備神部許也ト有を兼て出雲出雲之川上山是也ト註すが如く聞えて其義明くふさる故ハ出雲以下九文衍文と云説あどの起れるこ云も其實ハ右の七字の此小

脱たるか爲あり儲此ハ正書小是時素戔嗚尊自天而降到於出雲國敷之川上時聞川上有啼哭之聲下先首小云て老夫婦二神の所在ト其神の爲小大蛇を退治させ御在一坐ける所在を明せる故ハ後小此の如く斬蛇の地を擧る及ハざりける也ト此一書ハ上小直小素戔嗚尊欲幸奇稲田媛而乞之脚摩乳手摩乳對曰云云ト書出せる故ハ何地あり有つる故事ト知るれざりけれハ此終小至りて出雲敷之川上山是也ト又云て文を結ぶ所あり然しと雖も正一く春日日本御校正本の如く少て右の七字非多時ハ慥小其結ハ趣



あハ非ず其鳥上ハ本より有ける山あり峯ありけれ
 ば其外ハをる何れハ山ありけむを其傳ハ無きうい
 える
 あり

あむ通り難き所ありける 次の第四一書ありに出雲
 國敷川上所在鳥上之峯彼
 處有吞入大蛇素戔鳴尊乃以天蠅斫之劍斬彼大蛇之
 書され古事記あり速須佐之男命拔其所御佩之十
 峯^峯劍切散其蛇者肥河愛血而流と有ふと〇出雲敷之
 を合ちても右の七字無て叶いぬ所あり
 川上山是也ハ口訣小殺大蛇地也と云るハ上小七字
 の脱たるを知ざる故を意を補へつる説あり纂疏小
 所斬之蛇化之也上云蛇兩脇有山蓋即此山子と宣へ
 る御説ハ文を活せ句を機りせ給へる者ありて實
 小午古の卓説あり予亦此御説小就て大小得る所有
 了上^十下^十又小己小明の註せれば其所をあむ考合
 十九^十下^十但^但平^平が説ハ其大蛇の皆上ある山の謂
 す可^可りけ^りるゆる敷川上ある鳥髮峯と化れり云



